

デジモンアドベンチャー エクス
トリーム～6色の新たなる選ばれ
し者達の冒険～

瑞田高光

電腦世界……通称、デジタルワールド。ここには、電腦獣……デジタルモンスター、通称デジモンという生き物が楽しく暮らしていた。

しかし、光があれば影がある。そのデジタルワールドの闇といえる存在がこのデジタルワールドを支配しようとし、更にはリアルワールドへの進出を目論んでいた。それを良しとしないあるものがリアルワールドにいる6人の男女をデジタルワールドに呼び込んだ。しかし、彼らはデジタルワールドに対しての知識がとても乏しいのではと危惧したあるものは、更に過去にデジタルワールドを救った経験のある6人の男女に救援を求めた。

これは、そんなリアルワールドから呼ばれた6人の選ばれし者たちと、過去にデジタルワールドを救った6人の少年少女たちによる、新たなデジタルワールドを救う物語である。

彼らに立ち塞がる強大なる敵や、受難を前にして、彼らはどう感じるのだろうか……

この物語は、作者の想像を元に、別の小説投稿サイト『小説家になろう』様のユーザの方々より頂いたオリキャラと、そのユーザの方々の好きなデジモンアニメの人間キャラによるほのぼの旅物語な部分があります。そして、一部オリキャラは作者の都合上、若返りトリップを果たしています。更に、この物語はオリジナル部分が大多数を占めます。それらの苦手な方はブラウザバックすることを超絶お進めします。

目次

プロローグ	旅立ち	1
プロローグ	選ばれし子ども達の新たな旅立ち	1
堇色の選ばれし者の旅立ち		10
鴝色に選ばれし者の旅立ち		14
碧色に選ばれし者の旅立ち		19
黒焦茶色に選ばれし者の旅立ち		24
枯草色の選ばれし者の旅立ち		28
縹色に選ばれし者の旅立ち		32
第1話	出会いその1	37
鴝色と奇跡の出会い		37
堇色と氷の出会い		42

縹色と闇の出会い……………

52

碧色と希望の出会い……………

57

黒焦茶色と陰陽の出会い……………

62

枯草色と愛情の出会い……………

69

第2話　～出会いその2・そして、各々の想い～

75

小熊の心に秘められし大きな想いと少女の暖かい優しさ……………

75

明るい鳥の心に秘められし真の心と静かなる少年の心に宿る慈しみ

の心……………

86

小さき体の中にある頑固な勇気とその勇気に応える太陽の獣……………

95

到着、チビモンの村！そして好奇心旺盛な子竜の固い決意……………

100

戦乙女との出会い、そして少女と戦乙女との繋がる想い……………

110

辿り着いた先には……………そして、仲間を案じ心配する希望の想い……………

120

プロローグ　　～旅立ち～

プロローグ　　～選ばれし子ども達の新たな旅立ち～

ルーチェモンを倒して、デジタルワールドを救ってから1年が経過した夏休み……
渋谷駅に2人の少年達がやって来ていた……………

「そういや、友樹君は最近サッカーチームに入ったんだっけ？ 拓也君と一緒に……」
「うん！ まだ、始めたばかりだから上手くないけど……新しい友達も出来たし、練習は楽しいよ！」

髪は短めのショートで服装も黒っぽいシャツにオリーブ色の七分丈のパンツを着用している第一印象だけならば爽やかイケメンと言える少年…… “木村輝一” は隣で歩いてる薄い水色のシャツに茶色の半ズボンを着ており、茶色のハンチング帽を被ったまだあどけなさの残る顔つきの男の子…… “氷見友樹” に話し掛けた。友樹

は頷いて笑みを見せながら輝一の問いに答えた。

「でも、突然呼んじやってごめんね？」

輝一は少し申し訳なさそうに話すと、友樹は首を振って気にしないという顔で語った。

「ううん！ 別に気にしてないよ！ 輝二さんの誕生日プレゼントを選ぶなんて楽しそうだもん！」

そう、彼らはこれから二人で輝一の双子の弟である輝二への誕生日プレゼントの買い出しに来ていたのだ。

「それにしても、何が良いかなあ……」

「そうだね……」

二人がそのプレゼントをどうしようか考えていると……突如として二人のズボンのポケットの中で携帯電話が震えた。

「っ！……っ？」

二人は慌てて携帯電話を取り、受信メールを確認する……すると、そのメールにはこう記されていた。

『あなた方の世界とは別の世界のデジタルワールドに危機が迫っています。その危機を救う勇氣がありますか？』

・YES

・NO
』

「輝一さん……これ！」

「うん。僕の所にも届いた……これ、文面は違うけど……あの時と同じだ……」
二人は迷うことなく、YESを押した。自分達とは違う世界のデジタルワールド……そこが危機に瀕している。ならば、助けないと。二人の決意は同じだった。
すると、再び電話が震えた。また受信メールを確認すると、今度はGPS機能の様なもの画面に記されていた……そして、画面には1つの矢印が表示されていた。

「……この先に進めて事かな？」

「多分、そうだよ……輝一さん、行こう！」

「うん！」

二人は矢印の先にある場所を目指し進んだ。

そして、二人が辿り着いたのは一基のエレベーターの前に辿り着いた。矢印はここでエレベーターを指差していた。

「……………行こう」

「うん、僕達に出来る事があるなら助けたいしね！」

輝一は友樹の言葉に頷いて二人でエレベーターに乗り込み、B2Fのボタンを押した。

そしてエレベーターが止まり、扉が開くとそこには1年前のあの日とほぼ変わらぬ光景が広がっていた。

「着いた！」

「でもトレイルモンの数が……」

そう。友樹の言う通り、1年前にはすべての乗り場に居たのだが、今は2箇所にしかなってない……そして、二人の携帯に表示されている矢印は別々の乗り場を示していた……………

「僕はコッチだ！」

「僕はコッチだね……………どうやら、違うトレイルモンに乗らないといけないようだね…………」

「うん…………」

友樹は輝一の言葉を聞いて少し顔色が暗くなる…………

「大丈夫？」

「うん…………大丈夫！僕はいつまでも守ってもらっただけじゃないもん！」

「そっか…………それじゃ、元気でね！」

「うん！」

友樹と輝一は軽く握手を交わすと、互いに目的のトレイルモンへと向かって走り出した！

一方、お台場小学校のパソコンルームでは…………

「なあ、今までこんなことあったか？ タケル…………」

「無かったよ……」

「そうね……光子郎君は試験勉強してるし……京ちゃんも受験だからね……」
赤茶色のボサボサの髪にゴーグルをつけた少年……本宮大輔は、少し暗めの金色の髪を持ち、白い帽子を被る少年、高石タケルに訊ねた。タケルは大輔の言葉に少し苦い顔をしながらも頷いた。そして、オレンジ色の髪を持つ女性……竹之内空はパソコンに詳しいメンバーが居ないことを呟く。

「それにしてもよ……今まであったか？ 3台のパソコンにデジタルゲートが開くなんてよ……」

「それに、僕達が特定のパソコンの前に来ないと開かないなんて……」

「私のデジヴァイスでも開くのかしら……」

大輔は少し顔をしかめつつパソコンの前に立ち、タケルもまた、複雑な顔でその隣のパソコンの前に立った。不安そうな顔をする空もまた、タケルの隣のパソコンの前に立った。

「今更っすよ……それじゃ、行くぜ！」

「うん！」

「そうね、行きましょー！」

大輔の言葉に空も決心したようで、頷く。そして3人は各々のデジヴァイスをパソコンの画面へと向ける。

「『選ばれし子ども達……起動!!』」

そして、3人が同じタイミングで言うと、3人の体はそれぞれ別のパソコンへと吸い込まれていった……

はたまた、新宿中央公園では一人の髪を上の方で1つに纏めた少女が歩いていった……

「はぁ……そういや、あれからもう半年かぁ……レナモン、元気にしてるかなぁ……」

彼女の名前は牧野留姫。半年前にデ・リーパーを退けた後、パートナーであるレナモンと別れて以来、留姫は今までとは違い笑顔が多くなっていた。

しかし、レナモンの事を忘れた事は一度も無く、時折この様に新宿中央公園に足

を運んではある場所へと向かっていた。

「あ、まだ残ってるんだ」

留姫はその場所に辿り着くと懐かしそうに目を細めた。すると……………

「……………ん、何か様子が……………!?」

留姫はふと辺りに違和感を覚え、辺りを見渡す……………すると、周りのすべての動きが止まっていた……………風で揺れていた木々の葉や、風に揺られる一輪の花……………ふと、後ろを見れば先程までおいかけっこをしていた子ども達もその動きが止まっており、動いているのは留姫だけだ。まるで、留姫以外の時が止まったかのようだった……………

「何……………これ……………?!」

留姫が戸惑っていると留姫の足元に不思議な色をした穴が広がった。

「キャアアアアアッ……………」

重力には敵わず、留姫はそのまま穴の中へと消えていった……………そして、その穴が消えると、止まっていた時が再び動き出した。

唯一違うのは、留姫がこの公園から姿を消した事だけだった………

堇色の選ばれし者の旅立ち

このタイトルの色の名前は『すみれいろ』となっています。

〓 20〇〇年〇月〇日・広島市某所〓

現代のある日……広島市内のあるマンションの一室にて青年がパソコンに向かって何やら作業をしていた。

「ん……ここの音楽はこっちが良いかな？ んと………今日はこんなもんかな。んじゃ、とりあえず保存保存っと………あ、そうだ、アッチにそろそろ小説アップしとこー！」

彼の名は「泉佐野 龍星（いさの たつほし）」とある動画サイトで動画を投稿しつつ、とある小説サイトにているいわゆる自宅警備員と化した青年だ。彼本人は、「アルバイトをしているから自宅警備員じゃない」と言い張っているらしいが………尚、食事の殆どがインスタントラーメンの模様。

「……ふう、何とか今日のノルマ達成……」

龍星が椅子に座ったまま体を伸ばしていると、パソコンのメールボックスに一通のメールが届いた事を知らせるアイコンが表示された。

「……………ん？……………メールう？ 題名は……『HELP』？ 助けてって事か……？」

龍星は眉をしかめながらもメール受信画面に移動した。すると、画面にはこのような文面が表示された。

『

To: 泉佐野 龍星様

From: ????

件名: HELP

貴方は本当にデジモンが居ると信じてますか？

YES・NO

』

そして、YES・NOの部分はクリックできるようになっていた……………

「な、なんじゃこりや……………デジモンが本当に存在するか信じるか……………って……………」
龍星は少し戸惑いを覚えた。確かに、龍星はデジモンが大好きでよくDVDを借りたりしてそれを見ながら時々「デジモンが本当に居たらなあ」と呟っていたのだ。
しかし、実際に居る事を信じるかと聞かれると話は別だ。空想ではいてほしいが、ここは現実を見るべきなのかどうか……………それで龍星は悩んでいた。

「う……………しゃあねえ!!」

龍星は『YES』の項目にカーソルを合わせた。信じたかったのだ。デジモンと本当に会えたらどれだけ幸せなのだろう……………そんな今までの空想が実現出来るのかも知れない……………そう考えるとドキドキが止まらなかった。

そして、YESをクリックした……………すると、画面が突然光だした……………
「えっ!? ちょ、何これっ!? 一体な」

一体何が起きている

そう発する事はないまま龍星はパソコンの画面へと吸い込まれて行った……………
そして、彼の部屋に残っているのは明日のゴミだしの為に纏めてあるゴミ袋とその

そばにある空になったゴミ箱、沢山の山積みになった漫画本に、ゲーム類……そして机の上には光の収まって、メール画面に

ようこそ、デジタルワールドへ

と書かれた文字列が残っている電源の点きっぱなしのパソコンだけだった……

鴝色に選ばれし者の旅立ち

（2014年〇月〇日）

春一番が吹いていて、まだ夏の気配すら感じない春爛漫な1日であるこの日、大阪市淀川区にあるアパートの一室から一人の女性が出てきた。

「いい天気ー！ こういう日に仕事がないって最高ー！」

彼女の名は五十嵐夕輝（いがらしゆうき）。今日は仕事がないらしく、非常に何かを楽しみにしている笑顔をしていた……その時、夕輝の手にあるバッグの中から何かの音が聞こえた。

「……ん？ 何なんだろう……急な仕事だったら嫌だあ………」

夕輝は不満を漏らしつつバッグの中から携帯電話を取り出すと、どうやら音声電話だったらしい。夕輝はその相手が非通知であることに少し怪訝な顔をしつつも電話に出た。

「はい、もしもし………」

『……………を……………て』

「……………あの、どちら様ですか？」

『……………ワ……………を…け…』

夕輝は何かおかしいと直感で感じとったのか一度静かに聞こうとした

『……………けて』

『デジ……………ールドを……………』

『……………タル……………助けて』

ここで夕輝は相手が何か助けを求めている事を知り、少し険しい顔になった。そして、次の言葉に耳を疑った。

『デジタルワールドを助けて』

「えっ……………!？」

デジタルワールドを助けて

この一文に明らかな違和感を感じた。

「デ、デジタルワールドって……………あのデジタルワールドでしょ？　なんで……………そのデジタルワールドをアタシが??」

夕輝は困惑していたが、すぐに電話口に向かって喋りはじめた。

「ねえ、どこに行けば良いの？ デジタルワールドにはどうやって行けば??」

要件を伝えると、夕輝は再び口を閉じ、相手の言葉を聞き取ろうとした

『連な……石の塔………麓にある石………入口………』

そして、夕輝が微妙に聞き取れた後もう一度聞こうとしたが、電話は切れていった………

「連なる石の塔………それと麓に石………そこに入口があるって言いたかったのかしら？」

夕輝は必死に頭を働かせ文字を繋げつつ考えた……すると、1つの答えが導き出した。

「……あ、もしかして………!!」

夕輝は自分の考え付いた答えが合っていることを信じて目的の場所へと走り出した。

「連なる石の塔………その麓………側に石がある………それってつまり………!!」

夕輝は目的の場所へと辿り着き、あがっている息を整えながら喋った。そして、目的の塔を見上げながら答えを言い放った。

「それは………タイムストーン400!」

そこには確かに石が縦に連なるまさに石の塔と言えるべき物が………そして、その近くには石が1つ置いてあった……

「確か、ここに………!?」

そして、夕輝が側にある石に目を向けると、驚きの光景が広がっていた。そこには、夕輝が画面越しでしか見たことのない………だが、一度は持ってみたかったものが石の上に置いてあった。それは……

「デジ……ヴァイス………!」

デジヴァイスだった。夕輝は驚きと嬉しさの入り混じる不思議な感覚に陥っていた。そして、夕輝はそれを躊躇なく手に取った………すると、その石の上に不思議な穴が開いたかと思うと………

「えっ、ちょ………いやああああっ!!」

夕輝はそのままその穴に吸い込まれていった………そして、夕輝を吸い込んだ

穴が消えると、辺りには何事もなかったかのように一面に風が吹いていた……

碧色に選ばれし者の旅立ち

このタイトルの色は『あおいろ』と読みます

2014年〇月〇日

埼玉県はさいたま市のある一軒家……そこで一人の青年が窓を開けた。

「いい天気だなあ……」

彼の名は水谷桂吾（みずたに けいご）。少々人見知りな一面はあるものの、友達等を思いやる心は人一倍ある……。が、思いやりすぎて友達や知り合いを貶す相手には激怒する事がある青年だ。

「うーん……今日はドコに出掛けようかな………」

桂吾は快晴の空を見上げてどうしようか迷っていると、部屋の中で電話が鳴った。ちなみに、今日は桂吾の通う中学校が休校であった。

「ん？ なんだなんだ………」

桂吾は勉強机に置いてあった自分の携帯電話を手にとった。すると、一通のメールが届いていた事に気付いた。桂吾がそのメールを開くと、差出人は不明で、本文にはこう書かれてあった。

『電脳世界とこの世界を救いたくば鉄道博物館RFへ向かえ。』

という1つの文章だけだった。

「何……これ………」

桂吾は明らかに不審なこのメールを削除しようと考えた……そして後は決定ボタンを押せばこのメールは消滅するところまで来た……が、その決定ボタンを押す前にふと思うところがあり、その動きを止めた。

「待てよ……この世界を救いたければ……って、僕達の世界の事?? ……」

もし……もし本当にそうなら、大変な事だよね………」

桂吾は少し考えた後で、出掛ける準備を整えた。『やっぱり、自分達の世界の事なら放っておけない』

それが、桂吾の答えだった。桂吾は荷物を簡易的に纏めると、家を出た。

「えっと……確か鉄道博物館は………」

道のりを思い返しながら桂吾は走った。万一、違う世界の事だったとしても、助きたい。その一心で走った。

「……………ここ、だよね？」

無事に辿り着き、入場料を支払いエレベーターで最上階までやって来た桂吾は辺りを見渡した。

しかし、辺りを見渡しても、見えるのはガラス張りの展望台やそこから景色を眺める人々の様子しか見えなかった……………と、その時再び携帯が震えた。

桂吾が再び手に取ると、今度は画面に奥まった部分を指す矢印が現れた。そしてその方向に向かって歩いていくと…………

「え、何これ……………」

そこには、何度も来た事のある桂吾でも一度も見たことのない入口があった。そして、そこにはロープを被った不思議な人が立っていた。

「あ、あの……………」

桂吾が勇気を振り絞り、そのロープの人に話し掛けると、無言で桂吾の携帯を指

差した。

「え、あ……これですか？」

桂吾が恐る恐る携帯の画面を見せると、その人は頷いてゲートを潜るように促した。

「……………」

桂吾は意を決して、そのゲートへと足を踏み入れた。すると……………

「うわわっ!?! な、何これ……………?!」

まるで、宇宙空間の様に体が宙に浮かび上がったのだ……………そして、何か物音が聞こえ、桂吾が後ろを振り向くと……………

「あっ…………ゲートが……………!」

今しがた潜ったゲートがみるみる小さくなっていき、あっという間に閉じていくのが見えた。桂吾は閉じてゆくゲートに手を伸ばそうとしたが、途中でその手を止めた。

「助けにいくって決めたのは自分じゃないか……………」

そう言って自分を奮い立たせると、桂吾は前を向いて先へ進もうと辛うじて見

える床を蹴りながら進んでいった……自分の決意をもう忘れるまいと考えながら……

黒焦茶色に選ばれし者の旅立ち

2014年〇月〇日

大阪市天王寺区……ここはあの有名なお寺の1つである四天王寺があり、更に今田〇司さんや、和田ア〇子さん等……多数有名人を輩出している地区である。

そして、この地区にある一棟のモダンな外装の4Fにある角部屋の一室にて、スーツ姿をしておりお客の対応に追われている女性がいた。

「はい、コチラが原本の書類ですね。そして……コチラが頼まれたギリシャ語、英語にそれぞれ翻訳を済ませた書類となっております。特急要請でしたので、割高となり……このお値段ですが、問題なかったでしょうか？」

「はい！ 大丈夫です。後程振り込んでおきます。本日は忙しい中特急でやって頂き、ありがとうございました」

「こちらこそ、ありがとうございます。またのご依頼お待ち申し上げます！」

「

彼女の名は峪奈緒（たになお）。高校卒業後、語学留学の旅で4年間ギリシャに

滞在していた時に学んだスキルを使って、2年前にギリシャ語&英語専門の翻訳事務所を立ち上げた事務所の所長。ただし、従業員は彼女一人だけである。しかし、ギリシャ語の翻訳はまだ数が少ない為か、仕事の依頼が予想より多く……想像よりも忙しくなりそうだったために、自室の隣の部屋を1部屋追加で借りてその部屋を仕事部屋へと変貌させた。

「ふう、最近忙しいからなあ……たまにはのんびり動物と触れあって癒されたいなあ……………」

奈緒がそんな風に呟いていると、突如、宅電が鳴り響いた。

「はいはい、今出ますよーっと！もしもし、峪ですけど……………」

奈緒が電話に出ると、電話口から切羽詰まった声が聞こえた。

『あの、私達の世界を救ってください!!』

「はっ!? いやいやいや……あの、どうしたんですか!？」

突然、電話で助けを求められ戸惑いつつもどうしたのか理由を訊ねる……………が電話の主は聞こえていないかのように続けた。

『早く助けてください！貴女方の世界にも被害が及ぶ可能性があるんです!! 貴

女なら、助けてくれると信じています』

「へっ、いや、あの……だから……どうして私なんですか?！」

『あべのハルカス地下の最下層にエレベーターで来てください！ 貴女の事をお待ち申しております。出来るだけ早く来ていただけると幸いです』

理由を尋ねようと試みるも、相手は自分の願いを言うだけいつて切ってしまった……

「な、なんなの……あの人………凄く切羽詰まった感じだったけど………」

戸惑いを隠しきれていないまま電話の受話器を元に戻した奈緒は、少し考えていた。

「私達の世界とあの人の世界が危機に瀕している………って言ってたよね………もしかして、私 Hero になれちゃうのかしら………」

英語の部分だけ発音が良いのは職業病なのとか……

「……まあ、行ってみるしか無さそうね。Let's go！」

奈緒は財布や携帯等を入れたポーチを手に取り、自室を後にした。

「よっし、あべのハルカス着いたあ！ 確かElevatorで最下層だったっけ……」

奈緒はここまで来る道中、28回もつんのめっていたが、転けることなく無事に目的地に到着し、そのままエレベーターに乗り込んだ

「……………あれ？」

……かのように思えた。否、確かに奈緒はエレベーターに乗り込んだ。それはまちがいない。しかし、エレベーターの扉が閉まった途端に、辺りの景色が一変し、色々な色が混ざりあっているように不思議な空間に居たのだ。

「え、これ、どういう……こと……………?!」

奈緒が戸惑っていると、突如として一陣の風が吹き、奈緒の体に吹き付けた。

「きゃあああああああ………」

奈緒は予想だになかった突然の風に対応できる筈もなく、体のバランスを崩して、一気に何処かへと飛ばされていった……………

枯草色の選ばれし者の旅立ち

2014年〇月〇日

広島で青年が異世界に飛んでつたのと同時刻……石川県金沢市のある小学校では午前中に授業が終わり、下校の時間となっていた……………

「それでは、さようなら！」

『さようなら!!』

児童の皆はワイワイお喋りを楽しみながら教室を後にする。そしてこのグループでも……………

「ねえ、錦君！」

「ん、なあに。橋本さん……………」

「錦君ってさ、好きな人とかいるの？」

「ん……………居ないかな……………そういう橋本さんは？」

「えっ……………私!？」

「あ、それ私も聞きたい！」

「俺も俺も！ なあ、橋本どうなんだよ！」

4人グループで仲良く会話をしながら教室を出た子の中で先程やんわりと受け流していた少年……彼は酒匂 錦（さかわにしき）。小学校6年生である錦は背はクラス男子では真ん中位、見た目は若干ポッチャリしている様子ではあるが、その温厚な性格でクラスの皆はとても信頼している一面がある。しかし、錦はある願いがあった。それは……

「あ、そういやさ……最近祐輔がさ、サッカー部の後輩とやけに仲が良いんだよなあ………後輩からもすっげえ慕われてるしよ……」

「へえ、そうなんだ……（羨ましいなあ………後輩に慕われてるんだ……）」

後輩に慕わりたい。そんな難しい事ではない様に思えるが、錦は人と話すのが少し苦手で、相手から話し掛けられないと人とは話せない事が多いのだ。だから、錦は後輩に慕われる人を憧れる………と、言うわけだ。錦が下駄箱にて自分の靴を取り出そうとしたとき……

「……あれ？」

自分の靴の上に手紙が置いてあるのに気付き、上履きを一度簞の上に置いてその

手紙を手にとった。

「……………」

錦は首をかしげて一度手紙を開いてみた。すると……

『山崎山にて新たな希望が見える』

としか書かれていなかった……

「山崎山って……兼六園の……あれ……………だよな……………」

錦は疑問を持ちながらもその手紙をズボンのポケットにしまい自宅への道を駆けていった。

その後、家へと帰宅した錦は自室でランドセルを下ろしてそのまま自分の小さめの財布を握り締めて家を出ては駆け足で兼六園へと向かった。

「ここ、だよね……………」

山崎山に辿り着き、切れてる息を整えながら、錦は辺りを見渡した。すると、辺りには金沢や兼六園の景色が一面に広がっていた。

「……でも、この手紙……どういう意味なんだろう……」

錦はズボンのポケットに入れたままだった手紙を取り出して開いてみる。

すると、突然一陣の風が辺りを吹き抜け……

「うわっ………あっ！」

吹き抜けた風が錦の手から手紙を抜き取っていった。錦は思わずその手紙を追いつけ、掛けた………が、昨日は大雨だった事もあり、足元がぬかるんでおり……

「うわああああああっ!？」

錦は足を滑らせて山崎山近くの池へと落ちていった………

縹色に選ばれし者の旅立ち

このタイトルの色は『はなだいろ』と読みます。

2014年〇月〇日

同時期に広島・大阪等で少年や青年、女性たちが異世界であるデジタルワールドへ旅立っている時、暦の上では春ではあるが、まだところどころに雪の残っている新潟県は魚沼市……お米所として知られているここにもまた、デジモンを愛してやまない少女が居た。

「デジモンの世界行きたいなあ……」

彼女の名は小野香流（おのかおる）。彼女には愛してやまない人が居た。彼女はスッと立ち止まって山の方を見て、口に手を添えて大声を出した。

「デジタルワールド行って輝一と旅がしたいー！」

そう、彼女はデジモンフロンティアの木村輝一が一番好きなのだ。と言うのも、

彼女自身が友人との恋バナになると真っ先に輝一を上げては自分の好みと輝一のキャラが合致している事を喋っていくのだ。そのペースは止まる事を知らぬため、誰かが途中で止めて別の話題に変えないとダメな程である。

「でも、会えるなら……会いたいなあ………」

香流がそう呟くと、持っていたポシェットに入っていた携帯が鳴った。

「……ん？ 非通知のメール??」

そこにはこう記されていた。

『貴女が最も会いたいと願うものに会える機会があります。この機会を使いたいですか？ 使いたい場合、C O C O R O 新潟の地下デジタル階までお越しください』

「えっ……何これ………」

香流は明らかに怪しいメール文章にドン引きしてしまった。しかし、本当に輝一に会えるなら会いたいという思いも少なからずあった。メールには続きがあったらしいため、そのまま画面をスクロールしていくと……

『p・s 現在、あなた方のデジタルワールドを虚悪なるデジモンが支配しようとしております。更に、そのデジモンは、デジタルワールドを支配した後あなた方

の世界を支配しようとするでしょう。その危機に立ち向かえる方々にメールを送らせて頂いてます』

「いや、明らかにこっちが本命だよね!? どう考えてもこれこっちの方が本題だね?! p・s・付けるの逆だって!!」

その内容に思わず香流は突っ込んでしまう……………が、軽く溜め息を吐くと

「……………ま、コッチの世界にまで被害が及ぶのなら……………行かないとね」

笑顔になりそう言うのと、そのまま現在地から最も近い駅である小出駅へと向かった……………

「だって、輝一に会えて、旅して敵を倒したら好きになってくれるかもしれないし、デジモンとも会えるこの機会を逃したら損でしょ!!」

明らかに目的と手段が入れ替わってしまっているが……………大丈夫なのだろうか……………

それから、1時間程が経過して……………香流は、新潟駅に到着した。

「よおっし、確かC O C O R O新潟の地下だっけ……デジタル階って何処なんだろう……………」

香流は目的の場所を反復しながらC O C O R O新潟の中へと入っていきエレベーターを探した。

「ん」と……………あ、あった！」

香流はエレベーターを見つけ、真っ先に乗り込むと、地下5階のボタンを押した。そして、エレベーターの中でふと、何かを思い出した。

「あれ？ 確かこのシチュエーション……………どっかで見たような……………あ、デジモンフロンティア！」

一人で何かを考えていて、ふと大声で叫ぶと、咄嗟に辺りを見渡した。すると、エレベーターの階表示が既にB5Fを過ぎている事に気付いた。

「えっ、えっ、本当に!？」

香流が軽くパニックになっている間もどんどんエレベーターは降りていき……

「うわあああ!!」

エレベーターが止まり、その扉が開くと、そこにはテレビで見たあのターミナルの光景が香流の眼下に広がっていた……そして、そのターミナルの奥の方にある乗り場に1台の列車の様なものが止まっていた。

「あ、アレって……………トレイルモン!？」

香流は目を輝かせてその列車……もとい、トレイルモンの元へと駆け寄った。拓也達の乗っていたトレイルモンとは違うように見えたが、それでも、見続けたいたトレイルモンであると確信できた香流は早速飛び乗った。

「うわぁ……………すごい!!」

香流は目を輝かせながら中を見渡していると、トレイルモンの扉が閉まる音が聞こえたため外の窓を見てみると、動き出しているのが見えた。

「これから、旅が始まるんだ……!」

香流は目を輝かせながら外の景色を眺めていた。

第1話　　～出会いその1～

鴉色と奇跡の出会い

「えっと……ここは………？」

夕輝が辺りを見渡すと、そこは鬱蒼と木々が生い茂る森の中だった……

「やっぱり……ここはデジタルワールド………なんかな？　アタシ、デジヴァイス持つとるし………」

夕輝はそう呟きながら手に握ったままの鴉色のデジヴァイスを見てギョツと握り締める。すると、一陣の猛烈な風が夕輝の体に吹き付けた。

「きゃっ………凄いい風やなあ………どちらにしても、この点滅している点に向かって行けばええんかな？」

夕輝はジッとデジヴァイスの画面を見ながら少し頷くと、赤く点滅している点の方へと向かって走っていった……

「それにしても……一体全体何がどうなってるんねやろ……………アレ、アッチも近付いてきてる??」

少しばかり走った夕輝は一度立ち止まって辺りを見渡してから再び画面を見ると、赤い点滅がコチラの点滅(鵒色)に向かって来ている事が分かった。そして、夕輝は突然ふとこんな考えが浮かんだ。

「……あ、でも……………もし敵だったら……………」

そう考えると少し身震いをしてしまったが、すぐに頭を振ってその考えを捨てて再び走り出した。

「それはその時！いまは敵だろうと味方だろうと合流しよう!!」

そして、幾分か走っていると……相手が見えてきた。

「アレは……………!!」

夕輝は相手が誰かを視認出来ると少し立ち止まって驚きの表情を浮かべた。その相手は赤茶色のボサボサとした髪で頭にゴーグルを着けている少年で……

「だ……大輔君??」

夕輝が一番好きなデジモンシリーズのキャラの本宮大輔、そしてその少し後ろ

にはそのパートナーであるブイモンだったからだ……

「ううん……ここは………?」

大輔は、気が付くと木が一杯ある森みたいな場所に立っていた。

「ここは一体何処なんだ……初めて見るけど………って、ブイモンは何処だ!？」
大輔は辺りを見渡していると、自分の近くにブイモンが居ない事に気付いて慌てて探す。すると……

「大輔えー!」

「あ、ブイモン!」

大輔が声のする方を向くと、近くの茂みから青い子竜……ブイモンが手を振りながら近付いてくるのが見えたので大輔も手を振り返した。

「大輔、ここ何処なんだ? 俺達の世界のデジタルワールドとは違うっぽいけど………」

「わかんねえ。でもよ、俺達がここに来てるって事はこの世界に何か異変が起こっ

たって事だろ？」

「どうなんだろ……」

「うう……」

大輔とブイモンが頭を悩ませていると、突然デジヴァイスの画面が光り始めた。

「ん、なんだなんだあ？」

大輔が画面を見ると、赤い点滅と動いている鴉色の点滅があり、鴉色の点滅が少しずつ近付いている事に気が付いた。

「っ……これ、誰か近くにいるのかも！」

「えっ、大輔……それ本当!？」

「多分な。行ってみようぜ！」

「おう！」

大輔とブイモンは頷きあうと、デジヴァイスの画面を便りに二人で走り出した。途中、鴉色の点滅の動きが止まった事もあり、大輔は焦ったがすぐに動き出したため、ホッとして再び点滅便りに走り出した。

そして、かなり点滅が近付いてきたところで……相手の容姿を確認できた。黒髪

をポニーテールのように結んでいるらしく……結ばれている髪が走りと同調して揺れており、白の柄つきパーカーに鶺鴒色のズボンを履いた女の子だった。そして、右手にはズボンと同じ色のデジヴァイスが収まっていた。

見たところ身長は自分のクラスの女子とは然程変わらぬ位かと思えた。すると、相手もコチラを視認出来たのか……コチラを見て眼を丸くして……………

「だ……大輔君っ!？」

立ち止まっては大輔の名前を叫んでいた。

「え……え?!」

「なあ、大輔……あの女の子……………知ってんの？」

「い、いや……………」

これが、五十嵐夕輝と本宮大輔の出会いだった……………

堇色と氷の出会い

「う、うん……ここは………?」

龍星がゆっくり目を開くと、そこには真っ青な快晴の空が見えた。そして、体に当たっているのが丈の非常に短い草地……芝生の様な物だと理解した。

「っ?!(俺、さっきまで自分の部屋に居たのに!?)」

状況を把握した龍星はスグに飛び起きた。そして、辺りを見渡して自分のいる場所が何処かを把握した。

「……(どうやら、小高い丘っぽい所にいるみたい………?)ん?」

龍星が耳を澄ませるとどこからか【何か】が近付いてくる音が聞こえてきた。龍星は近くに隠れる草むらを見つけてそこに身を隠した。

「(な、何なんだ………?!)」

龍星が警戒していると、コチラへと向かってくる【何か】の姿が見えた。

「(アレは………ゴブリモン………?それにしても色々な風貌の奴らが多いな………)」

龍星が息を潜めて様子を見ていると……ゴブリモン達の声が聴こえてきた。

「この辺りか……」

「おい、シャーマモン！ 本当にこの辺りに選ばれし子どもが来るんだろうな！」

「当然だ、ヒョーガモン。私に舞い降りた御告げが外れた事があるか？」

「別にテメーを疑ってる訳じゃねーけどよっ！」

「良いじゃねえか。そいつを俺達の奴隷にしてしまえば問題ねえんだからよお！」

「それもそうだな、フーガモン！ 良し、ここら辺一帯をシラミ潰しに探せ!!」

ゴブリモン達は棍棒を持ち上げて散開して搜索を始めた。そして、龍星のいる草むらにヒョーガモンと呼ばれたデジモンが近付いてきた。

「!!(選ばれし子どもを探してるの?! って事は……俺が狙われている………?)
に、逃げないと………」

龍星は自分の身に危険が及んできると察すると静かに立ち去ろうとした………
が、自分の後ろに小枝が落ちている事に気付かなかったため……

パキッ

「!!(し、しまっ……)」

「誰だ……!! 選ばれし子どもかつ!!」

小枝を踏んでしまい、ヒョーガモンに見付かってしまった……！

「ひっ……う、うわあああああっ!!」

「見付けたぞ！ 追えええ!!」

龍星は慌てて体の向きを変えて森の中へと逃走を試みた。後ろからヒョーガモンらの声が聴こえてくるため、振り返らない方が良いと思い、一心不乱に走って逃げた……が、逃げてる最中に龍星はふとこんなことを考えていた

「(あれ……こんなに俺って足遅かったっけ……それにさっき声が普段より高かったような……って、まさか……?!)」

龍星は、自分でも運動……特に走ることに關しては苦手意識があることを自覺している。だが、「平均より若干遅い程度だから気にしないでも良いか」と言えるほどだったのだが、今の速さはそれよりも圧倒的に遅かった……全速力にも関わらず……だ。その上、龍星は知り合いの同じ年代の知り合いと比べるとかなり低めの低音ボイスが特徴だった……のだが、先程発した声は自身の現在の音域では出ることのない高めの声……否、声変わりしていない時の声に似ていた。そう考えて辺りを見れば、龍星の目線からは確かに周りの木々は凄く大きく見えた。

「(これが……いわゆる若返りトリップって奴?! 俺、今何歳位なんだろ)……………つて、うわっ……………!」

考え事をしながら走っていれば、当然走っている方向への注意が疎かになる……龍星は足元の樹の根っこに足を取られてしまい、転けてしまった。

「い、いってて……………転んじやった……………!!」

龍星が急いで立ち上がろうとすると、背後の気配に気づいて慌てて振り返る……と、そこにはゴブリモン、ヒョーガモン、フーガモン、シャーマモンといったゴブリモン系列のデジモンが龍星を見下ろしていた……

「よおやく追い付いたぜえ……………? さあ、覚悟しなあ……………俺達がたんと可愛がってやるからよお……………!」

「あ、あわわ……………こ、コッチにくんな……………!!(い、いきなりの大ピンチイイ……………でも、泣きたくない……………泣いたら負けな気がする……………!)」

龍星は泣きたい心を押し留め、へたりこみながらも後退り距離を一定に保とうとしていた……が、ゴブリモン達の歩幅の方が大きく捕まるのも時間の問題だった……………その時

「伏せててっ！ ツララララ〜!!」

「ふえっ?! (この声……友樹!?)」

突然、何処からか聞き覚えのある声が聴こえてきて、慌てて龍星がそれに従って頭を抱えてその場にうずくまると……自分の頭上を何かが通った気配がし、更に冷気のようなものを感じとった。

恐る恐る前を向くと、小柄なシロクマの様なデジモンが自分を背にして立っており、ゴブリモン達は自分の前にいるデジモンと距離を置いていた……………

「もう大丈夫だからね、安心して!」

目の前のデジモンはクルリと振り返ると、ニコッと龍星に笑いかけた。その時、龍星の脳裏にある少年の笑顔が浮かび上がった。

「……ユウ、キ……………?」

龍星は無意識に幼き頃に失った、かけがえのない親友の名を呟いていた……そして、龍星の頬を涙が伝った。その涙は、彼が昔……友を失った時と同じだったかは本人しか分かり得ない事ではあったが……………

side友樹

「……ここかあ」

僕はトレイルモンの車両の中で揺られながら窓の外を見ていた。

そこには新緑の森が一面に広がっていて、僕はふと森のターミナルを思い出していた。

「また、皆に会いたいなあ……」

「おおーうい、着いたよおー」

「あ、うんっ！ ありがとう!!」

ポツリと呟いていると、トレイルモンが到着を知らせてくれた。僕はお礼を言つてトレイルモンから降りると、トレイルモンはそのまま扉を閉めて帰っていった。

「辿り着いたは良いけど……これからどうすれば良いんだろう……」

前の冒険では、拓也お兄ちゃん達が一緒に居てくれてたから付いていけば良かったけど、この世界では僕一人だけで考えないといけない。ふとそう考えると不安を

感じてしまう……………

「ええい！ 不安は禁物っ、いくぞおっ!!」

僕は一先ず歩いていく事にした。そうすれば、自然といくべき場所が分かるような気がしたから……

「それにしても、このデジタルワールドはどんな世界なんだろう……………っ！」

僕は慎重に歩きつつ辺りを見渡していた。すると、突然僕のズボンのポケットに入っていた携帯が震えだした。

そして、携帯を取り出すと携帯が光輝いていき……デジヴァイスになっていった。そして、デジヴァイスの画面には氷みたいなマーク……………チャックモンも、この世界に来ているみたいだった。

「チャックモン、これからも宜しくね！」

僕は自然とデジヴァイスに話し掛けていた。この声がチャックモンに届いているかは分からなかったけど。すると、デジヴァイスの画面が切り替わって、薄い緑色

の点と紫色みたいな色をした点滅している点が表示された。このまま真っ直ぐ行けば合流出来そうだった。

「もしかしたら、誰か居るのかも!!」

僕はそう思うと嬉しくなって思わず駆け出して行った。

「そろそろだよね……………あっ!!」

足を止めた僕が見たのは……………僕と同じくらいの子どもがデジモンに襲われそうになっているところだった!

「あ、危ないっ!!」

僕は気が付くと走り出していた。

あの子を助けたい!

その一心で走りながら、左手にデジコードの輪が出ているのを確認した。

「チャックモン……また、僕と一緒に戦おう！」

スピリット・エボリューション!!

チャックモン！」

そして僕は走ってる勢いそのままに地面を蹴った。そして、襲われそうになっている子に向かって叫んだ。

「伏せててっ！ ツララララ〜!!」

「ふえっ?!」

襲われそうになってた子が頭を抱えて小さくうずくまったのを確認するとほぼ同時に僕は体を氷柱の様にして敵陣めがけて突っ込んだ。けど、相手も相手で戦闘慣れはしていたようでバックステップを踏んで回避していた。

僕は地面に落ちるとそのまま体を元に戻し、自分の後ろの子の様子を確認しようと振り返った。

「もう大丈夫だからね、安心して！」

振り返ると、コチラを見ていた様で教われていた少年は栗色の短い髪で驚きと恐怖が入り混じった様な表情をしていた。すると少年は僕の方を見て……

「……ユウ、キ………？」

「え………？」

ポツリと誰かの名前だと思いう言葉を呟いて、涙をポロポロ流し始めたんだ………
一体、誰の事なんだろう……

これが、僕……氷見友樹と、この男の子の出会いだった。この時は、まさかこんな事に巻き込まれてるとは思ってもよらなかったんだ………

縹色と闇の出会い

「うわあ……辺り真っ暗あ……………」

香流はトレイルモンの座席に座って、窓の外を見ると、トンネルを抜けたかと思うと辺りはあっという間に漆黒の闇となっていた……………すると

「うひゃっ!？」

突如として香流の体が浮いたかと思うと、車両の後ろにゴロゴロと転げ落ちてしまった。

「いたたたあ……すっかり忘れてたあ……………けど、コレがあるって事はやっぱりデジタルワールドなんだあ！」

少し涙目気味になりながら打ち付けた腰を擦っていたが、次第に笑みを浮かべた。

「到着！」

その後、何事も無くトレイルモンは到着し、ドアが開くと、香流はターミナルへと降り立った。すると、扉がしまり、トレイルモンは何処かへと消えてしまった。

「それにしても……ホント、真っ暗……………」

香流が改めて辺りを見渡すと、辺りには光源と思われるものが殆ど見当たらず、遠くでボンヤリと一つだけ見えるだけだ。

「これじゃ、足元が心許ないなあ……………何かライトとか無いかなあ……………?!」

香流が辺りを見渡していると、後ろから灯りがこちらに照らされているのが分かり振り返ると、何やら明かりのような物が1つだけ少し遠い場所に点き、動いているのが見えた。それに香流は思わずビクッとしてしまった。

「誰か……………いるの……………?!」

香流は相手の顔が見えないために少しビクビクしながらも声を掛けた……………すると……………

「あれ……………僕以外に來ている子ども……………なのかな?」

「!?!?!」

香流はその声を聞いて驚き、思わず声をあげそうになった。それが、悪いデジモン等では無かった上に、その声の主が……………

「(この声……………輝一君だあっ!)」

香流自身が最も愛してやまない木村輝一だったからだ……………!

(今から数分前)

「ここが……僕が助けるべきデジタルワールド………?」

香流が到着する数分ほど前……輝一はこのターミナルに一足先にやって来ていた。

「……かなり外が真っ暗だな………トレイルモン、懐中電灯とかは無いか?」

『それなら座席の下に備えてあるよ』

「そうか、ありがとう」

トレイルモンから出る前に輝一はトレイルモンに懐中電灯の場所を訊ね、トレイルモンに言われた通りの場所にあった懐中電灯を手に取りトレイルモンの車両から外に出た。トレイルモンは輝一が出たのを確認すると、扉を閉め、その場を去った。

「それにしても、本当に真っ暗だなあ……」

輝一が、懐中電灯を点けて辺りを照らしながら辺りを見渡していると、後ろでトレイルモンが発車する音が聞こえた。

「……………うん？」

その音が聞こえた輝一は振り返って何があったのか色々照らしながら探していると、反対のプラットフォームに誰かが居ることに気付いた。その後ろ姿から女の子であるということ位しか想像つかないが、この世界の“選ばれし子ども達”の1人ではないかと輝一は考えた。すると、少女は自分が照らしている事に気付いた様で、振り返った。

「誰か……………いるの……………?」

その声はとても細々としており、怯えている様子だと見てとれた。輝一はその緊張を解してあげようと、ゆっくり近付きながら呟いた。それがどんな効果を発揮するかは分からなかったが、やってみる価値はあると考えた。

「あれ……………俺以外に來ている子ども……………なのかな?」

「!!!!??」

輝一は更に近付いて少女の様子を確認した。黒のレギンスにこげ茶のホットパ

ンツ……を履いており、明るい茶色の動きやすそうなジャケットを着ていた。そして、首もとには不思議な縹色をした痣のようなものが見えた。そして、とても整った顔立ちではあったが、何かに驚いている表情をしていた。

「あの、大丈夫？」

「え、あ……は、はいっ！ 大丈夫れすっ!! ……………」

輝一が恐る恐る声をかけると、少女は慌てて答えるが、思わず言葉を囁んでしまい、顔を真っ赤にしてうつ向いてしまっていた。輝一はその光景を見て首をかしげていた……

これが、少女……小野香流と、木村輝一の出会だった……………

碧色と希望の出会い

ここは建物の殆どが機械で出来ている街……そして、この街の中心地には大きな溶鉱炉等の設備が整っている………そんな街に、一人の青年が降り立った。

「ここは……一体………?」

青年……水谷桂吾は辿り着いた場所で辺りを見渡していた。そこは何やら街の様ではあったが自分の見知ってる様な街とは違っていた。

「と、とりあえず………ここが何処か調べないと………」

桂吾は少し辺りを警戒しながらも先に進んで行った。すると……

「……………?」

桂吾が建物の影からコチラを見ていた視線に気づき、振り返るとコチラを見ていた【何か】は慌てて建物の影へと消えていったのが見えた。桂吾は警戒を強めて【何か】のいた建物の影へと歩いていった………そして【何か】が隠れていた場所を覗いてみると、そこに居たのは………

「……………えっと、このデジモン……………ドラクモン……………だっけ?」

右目部分が赤く、左目部分が緑色になっている仮面のようなものを被っている両手の手のひらに目玉を持つデジモン……ドラクモンだった。

「確かイタズラ大好きなデジモンだったよね……？　もしかして、ここってデジタルワールド……？」

ふと、ドラクモンをジッと見ていた桂吾だったが……また別の視線に気付いた。
「（誰かいる？）………っ?!　う、嘘……本物……？」

桂吾が振り返ると、そこには自分の懂れていたアニメ……デジモンのキャラであるはずの金色に輝く短く刈られた髪と青い瞳が日本人と言うよりも外人を思わせる姿の高石タケル、そして……タケルに抱かれている哺乳類のようなデジモン……パタモンがいた。この光景に桂吾は驚きを隠せなかった……

「……ル………きて、タ………」

「う、うう………」

桂吾がデジタルワールドに来たのとはほぼ同時刻……別次元のデジタルワールドの

危機を選ばれし子どもとして二度も救った短く刈った金髪の青年……高石タケルは、街の外れで目を覚ました。そして、タケルが胸元に目線を向けると……

「タケル、おはよ！」

「ああ……おはよう。パタモン」

そこには共に旅をして……共に戦ったタケルにとって、とても大切なパートナーであるパタモンが笑顔で微笑んでいた。タケルはその微笑みに思わず自身も微笑み返してはパタモンの頭を撫でてあげた。

「それにしても、ここは一体……アンドロモンの街に似てるけど……」

「うん……ボクも最初はそう思ったんだけど……多分違うと思うんだ。工場っぽいのも見当たらないし……」

タケルが立ち上がって訊ねると、パタモンも首をかしげて答えた。どうやら、知り合いのデジモンのいる街では無さそうだった。すると……

「……デジヴァイスが震えている？」

タケルは自分のズボンのポケットに入っているデジヴァイスが震えているのに気付いて取り出して確認してみる。すると、その画面には碧色の点と緑色の点が表示

されており、その距離からそれほど離れていない場所に誰かいる事を表していた。

「……これ、誰か他にも居るのかな？」

「もしかして、大輔か空さん居るんじゃない？」

「うん、その可能性はあるよね。行ってみよう！」

その画面を見ていたタケルとパタモンは近くににいる相手を探すために、移動を始めた。

「デジヴァイスに反応があったのはこの辺りなんだけど……」

「あ、タケル！ あそこに誰かいるよ！」

「……どうやら、彼を指し示してる様だね……」

少し歩くと、パタモンが誰かを見付け、タケルもそれを視認出来た。

すると、相手もタケルに気付いた様子で振り返ると、驚きの表情になっていた。

相手の青年は黒っぽい緑色のTシャツに碧色のシャツを羽織っていて、濃い青色のジーパンを履いていた。すると、青年は驚きの表情のまま呟いた。

「う、嘘……本物……？」

「……………」

青年の呟きにタケルはただ首をかしげるだけだった……

これが、青年……水谷桂吾と高石タケルの出会いだった。

黒焦茶色と陰陽の出会い

「ここは……………」

奈緒が眼を覚ますと、まず目に入ったのは石のブロックで出来た天井だった。

「え……………一体何が……………?!」

奈緒は体を起こそうとしたものの、両手首に違和感を感じて見てみると……………思わず息を飲んだ。

視界には、鉄らしきもので出来た手枷……………そして、それと石壁を繋いでいる鉄らしきもので出来ている鎖が見えたのだ。

「何……………これ……………え、ど……………どういうこと?!」

特にこれといった家財とおぼしき物も一切見当たらない殺伐とした石で出来た室内に奈緒はただただ混乱するだけだった……………

「えっと……………どこから、逃げれないかな……………」

そう考えた奈緒は一度軽く深呼吸をして心を落ち着かせてから、再び部屋の様子を見直してみた。辺り一面が石のブロックで、目の前には鉄製と思われる扉がある

程度で……特に気になる場所は無かった………かと思われたが、壁の一ヶ所に目が止まった。

「あれ、あの場所……少し崩れてる………?」

奈緒は気になった場所を詳しく見てみたかったが、手枷が邪魔して近付けなかった……そんな時、錆び付いた扉がギィィと音を鳴らして開いた。

「……ほら、食事だ。人間」

そこから姿を現したのは青い帽子をツバを後ろにして被っている小熊を模したデジモン……ベアモンだった。手には石のような物で出来た食器に注がれているスープがあった。ベアモンはその食器を奈緒の近くにゆっくりと丁寧に置くと即座に立ち去ろうとしたが、奈緒はすぐに引き留めた。

「ちょ、ちょっと待って!」

「……なんだよ」

ベアモンは少し不機嫌そうに立ち止まって振り返った。

「ちょっとさ、この手の外してくれない?」

「はあ?なんでそうなるんだ。そんなことするわけが無いだろう」

奈緒は懇願するように頼み込んだが、ベアモンは冷めた目で座っている状態の奈緒を見下ろして答えた。

「……で、でもさ」

「枷を外さなくても食べれる位置に置いただろう？……もう、ボクは行くからな」
奈緒が言葉を続けようとしたがベアモンがそれを遮り、立ち去ろうとしたが……
奈緒はある事に気がついた。

「ね、ねえ貴方……背中怪我してない？」

「っ……」

奈緒が訊ねると、ベアモンは動きを止めた。

そう、ベアモンは背中に大きな傷をつけていたのだ。それは新しい感じな上になりに深いものだったようで、普通に動くだけでもかなり辛く感じれる物だと奈緒はスグに感じれた。それだけではない。注意して見てみれば既に治っているもの、かなりの傷を体に負っているのが見えた。

「貴方、本当はこんなことしたくないんじゃないあ……」

「うっさい！ たかが人間の分際で……っつう」

奈緒が心配そうに問い掛けるが、ベアモンは勢いよく振り返って叫ぼうとしたが、背中の傷が痛むのか、その場で蹲った。

「大丈夫?!」

「人間は！ ボク達、デジモンの玩具（オモチャ）となつてれば良いんだよっ!! だから気安く語りかけるな……っ!!」

奈緒は近付いて言葉を掛けたが、ベアモンはキツと睨み付けると、叫んでいたが、痛みには耐えかねてその場に倒れ伏してしまった。

「っ……!! ちょ、ちよっと……大丈夫!?!」

奈緒は驚いて近付こうとしたが、手枷が邪魔をして近付けなかった。

「もう……何で………何で助けられる相手が近くにいるのに、私は何も出来ないの………あの時みたいなこと、二度とあって欲しくないのに……」

奈緒はそう呟いて涙を静かに流していた………すると、突然何やら壁の反対側から不思議な音が聴こえてきた。

「え……?」

奈緒が振り向いた直後、手枷の鎖と繋がっていた壁が突然バラバラと崩れ去った。

「……」

そこに居たのは鋭い目付きが特徴的な少女……牧野留姫。そして、そのパートナーであるレナモンだった。

「……貴女、捕まっていたのね？」

「え、ええ……」

「安心しろ。今からここを脱出する」

留姫の問いに奈緒は少し驚きながらも頷くと、レナモンが奈緒の腕についた手枷を壊しながら逃げようと促した。

「あ、あの……このベアモンも連れていってくれない………かな？」

「……どうして？ ソイツはお前を捕らえていたデジモンの仲間じゃないのか？」
奈緒が倒れているベアモンを指差しながら頼むと、留姫は何故かを訊ねた。先程、留姫はこの場所を特定するためにこのベアモンに話を聞こうとしたが門前払いを受けた事をまだ根に持っているようだ。

しかし、奈緒は少したどしなながらも自分の想いを伝えた。

「た、確かに……私を捕らえてたデジモンの仲間だよ。それでも………私の目の

前で倒れていたら、私はその相手を助けたい。それに、このベアモンも本当はこんなことしたくない筈……」

そういうと、奈緒は倒れているベアモンへと視線を向けた。

すると、何処からかドタドタと走る音が聞こえてきた。

「っ！ 留姫。コチラに敵が近付いてくる」

「うん、分かった。それじゃあレナモンは、そのベアモンを担いで行つて。私はこの子と一緒に行く」

「了解」

その音を聞いた留姫とレナモンはそう互いに言うのと、レナモンはベアモンを担いだまま消えた。そして、驚いている奈緒に留姫は手をさしのべる。

「さあ、はやくここから逃げましょう」

「う……うん！」

奈緒は嬉しそうに留姫のさしのべられた手を握ると、共に走っていき、その場から脱出した。

これが、
峪奈緒と牧野留姫の出会いだった………

枯草色と愛情の出会い

「……………う、ううん……………ここ、は……………?」

少年は目を覚ますと、そこは何処かの小さな町の交差点の様な場所だった。彼は体を起こすと、自身に起こった出来事を思い返していた。

「確か……………山崎山で……………手紙が風に飛ばされて、それでぬかるみに足を取られて……………池に落ちた……………のかな?」

彼……………酒匂錦は少しずつ思い返していたが、最後の思い当たる場面に疑問を抱いた。そして、一度自身の体を見渡したり自身髪に触ってみたりした。

「濡れてないし……………池には落ちてない……………のかな」

錦は立ち上がると、ふと、ある1軒の家が目にと止まった。

「扉が……………開いてる?」

1軒だけ不自然に扉の開いている家を見付けた錦はその家に近付いた。

その家はその大部分が木で出来ており、屋根は藁などで出来ており、見た様子ではかなり昔の家の造りの様だった。

「お、お邪魔しまーす……」

錦は少し控え目に扉の中を確認すると、家の中は平屋建てで部屋は特に部屋区切りがされている訳ではない。家の中にはキッチンのような場所やテーブル等が真っ先に目についた。そして家の奥の辺りには藁の様なもので出来ているベッドと思える物が見えた。

「……誰かの、家？」

「おいっ！　そこで何をしているんだよっ!!」

「っ?!」

錦が中の様子を伺っていると突然、背後から怒鳴り声が聞こえてきた。錦が思わず体を竦めて振り返ると、そこには赤い羽毛に黄緑と黄色の嘴を持ったペンギンの様なデジモン……ムーチョモンが紙袋を両手で抱き抱えた状態で怒りの形相で立っていた。

「おい、俺の家ん中覗いてどうするつもり？」

「……別に、1軒だけ扉が開いてたら気になると思うけれど……」

「……………は？」

高圧的だったムーチョモンの表情が怒りから驚きが変わった。

「……あゝ、すまん。突然怒っちまって。まあ、立ち話もアレだし……入れよ」

「……………それじゃ」

ムーチョモンが苦笑いして家の中に入ると、錦を招き入れた。

「いやあ、最近ここら辺のデジモン達は泥棒に入られるからつって別んとこ引越
しちまってよ……ちょっとカリカリしてたんだ」

ムーチョモンは荷物を置くと、それを色々なところに置きながら話していた。

「ああ、そうだ。俺はムーチョモンってんだ。お前さんは？」

「……酒匂錦」

ムーチョモンが自己紹介をすると、錦も少し間を開けて答えた。すると、ム
チョモンは少し驚いた様子で訊ねた

「へえ、人間か。この辺りじゃ見掛けないが……どういった経緯でここに来たんだ
？」

「……分からない」

「……………あゝ、成る程ね。所謂“選ばれし子ども”って奴か。お伽噺だと思って

たが……まさか、本当に居るとはな」

「……？ それってどういう……」

錦の答えにムーチョモンは納得し、話し続ける。錦は『お伽噺』という単語を聞いて疑問に思ったのかその事を訊ねようとしたとき、ドアがノックされた。

「ホイホイ……どなたかな？」

ムーチョモンがドアを開けようと、ドアへと向かう。錦もそれを目で追い掛けていて、ドアが開いたときに驚きを隠せなかった。

「あの、ここってどういった街なんで……あら？」

「空！ もしかして……」

「多分ね……あの、あの子は……」

「ああ、アイツかい？ 多分だが、『選ばれし子ども』だと思うね」

そう。やって来たのは空だった。隣には、ピヨモンも居た。空は錦に気付くと、ムーチョモンに訊ねた。ムーチョモンは錦を簡単に紹介した。

「……どうも。酒匂錦です……」

「初めまして、武之内空です。こっちはパートナーのピヨモンよ」

そして、互いに挨拶を交わした。
これが、酒匂錦と武之内空の出会いだった。

第2話 　く出会いその2・そして、各々の想いく

小熊の心に秘められし大きな想いと少女の暖かい優しさ

「……………う、うう…………」

ボクが目を覚ますと、そこはいつもの石造りの部屋じゃなくて木で出来た天井だった。

「こ、ここは……………」あ、気付いた?」!？」

声が聞こえてきて振り向くと、そこにはあの少女がコチラを見ていた。その腕には手枷がついてなかった。それに気づいたボクは起き上がって叫んだ。

「お前……………ここは何処なんだっ!　そしてどうやって脱け出したっ!!」

「少しは貴方も利口になったら?」

「っ!？」

ボクの叫びに静かに答えた別の女の声が聞こえその方を振り向くと、そこにいた

のはもう一人の少女とレナモンがコチラを見下ろしていた。

「お前をあの場合から救い出そうと言ったのは奈緒だぞ」

「貴方、どうしてそこまで人間を嫌うの？」

「っ……そ、それは……………」

レナモンと少女の言葉にボクは言葉を詰まらせた。誰にも……言えない過去があると言うのに……………」

「別に、言わなくても良いわよ」

ボクがどう返そうか迷っていると、突然、あの少女が笑って告げた。

「…………え？ な、なんで…………」

ボクは思わず訊ねた。そして、問われた少女は少し首をかしげた後、微笑みながらこう言った。

「だって……誰にでも辛い過去はあると思うんだ。私もそんな過去を持つて……」

……その過去は話したくない。君も同じなんでしょ？ なら、無理に話さなくて良いよ。話したくなったら、話してくればそれでいいから」

「……………！」

その時の少女の微笑みを見てボクはある少年を思い出した。

『僕は君がどんな過去を持っていようと、僕は君の味方だよ。だって、僕は君の……』

『に、げて………！ アイ、ツに……捕まらないで！』

『ぼ……くは、君が、たす……けに………きてく、れるの………を………待って
る』

「……………」

「ど、どうして泣いてるの!？」

少女の声にハッとして腕で涙を拭った。いつの間にか涙を流していたらしい……

……それにしても……

「……………か」

「え……………」

「……………いや、なんでもない」

ボクは不思議そうに首をかしげる少女にそう言って考え始めた。

ボクは多分……………あのお方……………いや、あの男の元に戻っても……………許される
とは思えない。痛め付けられるだけで済むとも思えない……………それなら……………痛み
に耐え抜くのは……………もうこりこりだから……………

「……………名は？」

「え？」

「お前の、名は？」

「……………私は峪奈緒。奈緒で良いよ」

少女……………奈緒は笑って名を教えてくれた。なお……………か。

「アイツと一緒にの名か」

「え……………」

奈緒になら……奈緒にだけなら、話しても………良いかな？

「いや、何でもない。………なあ、俺の過去……聞いてくれるか？あと、出来ればボクと奈緒の……二人きりにしてほしい。別に危害を加えるつもりはないからそれは安心してほしい」

「え、でも……」

「………なら、私達は席を外そう。」

「うん。私たち、この場所の外にいるから………終わったら、呼んでね」

すると、少女とレナモンはアッサリと快諾してくれて二人きりにしてくれた。

「……ゴメン。突然、二人きりにしてほしいうって言っちゃって………で、でも……」

ボクは君に……君だけに、ボクの過去を伝えたいんだ」

「ベアモン………分かった。その代わり、話に嘘は付かないですよ？」

「………うん、分かってる。」

これから話すのは、紛れもない……ボクの過去だよ………

ボクはね、元々はある少年のパートナーだったんだ。その少年はすごく笑顔が一杯でね、無邪気な子だったんだ。

ボクとその少年……直（なお）は毎日色々な場所を旅しててね。とても楽しい毎日だった。

でも、ある日……あの男と1体のデジモンがやって来たんだ。その日から……このデジタルワールドは変わってしまった。

その男とデジモンはこの世界に来るなり……ある事を始めたんだ。

それは『子ども狩り』。選ばれし子どもを……いや、それだけじゃない。デジタルワールドに来ている子どもは当然のごとく、リアルワールドからも人間の子どもとかを引き込んでいるんだ。

そして……その男の魔の手は直にも及んだんだ……………

『坊主……私のもとにこないか?』

『嫌だ! お前が連れ去った子ども達を返せっ!!』

『直の言う通りだっ!』

『……仕方ない。殺さぬ程度に痛めつけて捕獲しろ、……モン』

『……Yes、マイマスター』

『あ、うう………』

『直……直を、どうす……るつも、りだっ………!』

『コヤツは私の思想に相反した。道具として償わせなくてはならぬ………が、貴様。貴様が私の元に来ると言うのなら少しは考えてやろう』

『っ………もし、断ったら………』

『コヤツは我が同胞のただの玩具(オモチャ)となるだけだ』

『………分かった。お前の元に行くよ。その代わり、直は………』

『ああ、しかと生き長らえさせてやる』

……と、言うわけでボクはあの男に負けて……奴の元に下った。ボクの背中の傷は……あの男との戦いで負ったもの……今でも、痛むんだよね……」

ボクは苦笑いをする、背中の傷に軽く手を当てながら話を終えた。今でも痛むこの傷は……ボクにとっては忌むべきもので……悔しさを忘れない為の戒めでもある。

「……………ねえ、ベアモン」

「……………？ どうs……え、な、奈緒!?」

うつ向きながら訊ねた奈緒に疑問を抱いて首をかしげていたボクだったけど、突然抱き付かれて戸惑った。

「そんなに辛い想いをしてたんだね……辛かったよね……………」

「……………」

……奈緒はボクを優しく抱き締めながらポツポツと話し始めた。抱き締める力は強くない。ボクならすぐに抜け出せる筈だけど……なぜか体に力が入らなかった。それどころか、涙が出てきそうだった。

「こんな小さい体に一杯辛いこと抱えないでよ……」

「……！」

『僕はさ、君が辛いならその辛さを分かち合いたい』

「私ね、ベアモンの辛さを一緒に分かち合いたいの」

自然と……ボクを抱き締める奈緒の姿が………僕の記憶の中の直と被る……

『だから……泣きたいときは思いっきり泣いて良いんだよ？』

ボクは……もう、涙を堪える事が出来なかった。だから………

「ヒグッ……うわああああああん！」

ただただ、奈緒の胸の中で泣きじゃくった。今までの積もりに積もった辛い思いや不安な気持ちの全てを体の外に出すように………

それから数分経過し、泣き止んだベアモンは奈緒から一度離れた。

「……ゴメンね、突然泣いちゃって………」

「ううん！ そういうの気にしないで！」

「でも……これから、どうしよう………ボクが、あの城から逃げちゃったから……

……直は……」

ベアモンはハッと何かに気付くと、不安そうな表情を浮かべた。ベアモンは、不意ながらも城を離れてしまった故に、直が心配になってきたのだ。

「な、ならさ！ 私と一緒に……直君を連れて帰ろう？」

「えっ!? ……え、いい……の？」

奈緒は励ます様にベアモンに話し掛けた。ベアモンは少し戸惑いながらも訊ねた。

「うんっ！ だから……直君が帰ってくるまで……私がパートナーになるよ！ 多分、これから辛いこととかたくさんあると思う。でもね、パートナーなら、それを半分こにできるし……嬉しいことは二倍に増えるから！」

「……う、うん！ 宜しくっ！」

奈緒とベアモンがギュッと手を握って握手を交わした……その時、奈緒のポケットの中から何やら光が漏れ始めた。

「え……?？」

奈緒が不思議そうに光源となっているを取り出すと、それは奈緒の携帯だった。

少しすると、奈緒の携帯は少しずつ形を変えていき……最終的には、デジヴァイスの姿へと変化した。そのデジヴァイスの色は、明るい黒こげ茶色をしていた。

「これが……私のデジヴァイス………!!」

奈緒が自身のデジヴァイスを手に取り、優しくギュッと抱き締めていると……突
然、レナモンが姿を現した。

「奈緒っ、ベアモン！ 敵襲だっ!!」

「「えっ………!?!」」

奈緒とベアモンは互いに顔を見合わせて、レナモンと共に部屋を出た。共に力を
合わせて戦うために………

明るい鳥の心に秘められし真の心と静かなる少年の心に宿る慈しみの心

「それでね……………」

「へえ、そうなのか……………」

「そうなのよ！ その時にね……………」

「……………」

思いがけぬ空との出会いを果たした錦はどうしていいか分からず、口数が少なくなっていた。

それをみかねたムーチョモンが、空とピヨモンを招き入れて空達の旅を聞かせてほしいと提案した。空とピヨモンはそれを快諾し懐かしそうに話し始めた。

しかし、空とピヨモンは嬉しそうに話しているのを見た錦も最初の内は話の輪に入っていたが、ムーチョモンの相槌の勢いに押されてしまい、また話せなくなってしまうた。3人（1人と2匹）は楽しそうに会話しているのを錦は軽く微笑しな

がらフウツと部屋の様子を見渡していた。すると、錦の目線は一つの写真立てで止まった。

その写真には、一人の男の子とムーチョモンが笑いながら映っていた。そして、その男の子の手には薄紅色に輝くデジヴァイスが光っていた。

「アッ……」

ムーチョモンが錦の目線に気付き、慌ててその写真立てを手(翼?)にとって戸棚の中へと仕舞った。

「? さっきの写真って……」

「あ、ああ。アレは前に人間の子どもが来てな。それで記念につつうんで撮った奴なんだ。それで出会えた記念につて俺にもくれてな……全く、困ったもんだぜ……」

「へえ、そうなの……」

空の問い掛けにムーチョモンは少し早口になりながら答えた。空は何の疑問も持たずに頷いていた。しかし、錦はムーチョモンの話し方に疑問を抱いた。

錦は話を聞くのが得意な為か、自然と相手の口調で相手がどんな感情で話しているかが大まかにだが、分かるようになっていた。そして、ムーチョモンの話し方を

聞いていた錦は一つの結論に達した。

「もしかして、あの男の子は……ムーチョモンのパートナーだったんじゃない……？」

「それじゃあ……私達はそろそろお暇（いとま）させてもらおうかしら………錦君。良かったら、一緒に行かない？」

「え、あ……はい」

錦が考え事をしてしていると、空は立ち上がって錦に声を掛けた。錦は考え事をしてたせいで少し戸惑いのある返し方になっていた。

「……………あの、ムーチョモン？」

「………なんだい？」

そして、いざムーチョモンと別れようと言うときに錦は意を決してムーチョモンに話し掛けた。ムーチョモンは首を少しかしげて訊ねた。錦は少しの間無言になっていたが……真っ直ぐムーチョモンの目を見て問い掛けた。

「あの写真に写ってたのって……ムーチョモンのパートナーなんじゃない？」

「なっ……!!」

「えっ!!」

錦の予想外の問い掛けに空とピヨモンは驚き戸惑っていたが……一番驚いていたのはムーチョモンだった。目を見開き、口（嘴）は開いたまま硬直していた。

「だって、写真に写ってたムーチョモンも男の子も……笑ってた。少し迷惑に思ってたのなら、あんな笑顔になれないし……さっきのムーチョモンの言葉もあの写真について詳しく突っ込まれたくないって思いが伝わってきた。もし、良かったら……彼のことを教えてほしいんだ」

「……………っ!!」

錦は視線を下に落としてポツポツと自分の感じとった違和感を話し、再び視線をムーチョモンに向けて、教えてくれと頼んだ。ムーチョモンは視線を右下側に逸らして体を震わせていた。そして、フツと両手（翼）を下に垂らして錦の方に顔を向けた。

「……………分かった。何処から話せば良いんだ？」

「彼の事や、この世界に起きてること……君の知ってる範囲内で」

「ああ……分かった。話すよ、俺と……俺の大切なパートナーであり……親友（とも）、勇気（ゆうき）の話を。そして……この世界で何が行われているのか………をな

アレは一昨年位……だった、かな。俺はある少年と出会った。そいつは気弱な奴でな、ちよつとした事で体の調子が悪くなり、薬を飲む奴だった。でも、明るさは人一倍あった。俺はそんなアイツ……勇気の事が気に入って、共に行動をすることにした。アイツの体のことを考えると長旅には出来なかったが、それでも楽しかった。

しかし、ある日奴等はこの世界にやって来た。最初は何をしているのか分からなかったが……ある日、突然奴等が現れて………勇気を……連れ去ったんだ……！体の弱い勇気は立ち向かうことなく連れ去られ……俺はそれを止めようとしたが………こう言われた。

『お前なんぞ殺す価値もない』

ってな……俺はそれに何も言い返せなかった………とまあ、だいたいこんな所だ。俺の知ってる事は……」

ハハッと気丈に振る舞い軽く微笑むムーチョモンだったが、その微笑みはどこか悲しみや悔しさがどこことなく感じれ、その声も力強いものではなかった。

「……なんで」

「……………え」

「そんなに辛い話なのになんで笑えるの？……いや、笑ってるつもりなの？」

「な、何を言って「辛いんでしょ？……だって、涙流してるもん」……ち、違……………！」

ムーチョモンは驚きの表情のまま無理矢理で腕（片翼？）で涙を拭おうとしたが、それを空と錦に止められた。

「ダメよ。辛い事から逃げ出したい気持ちも分かる」

「でも、逃げてるだけだと……何も変わらない。ただ過去に囚われているだけ」

「そ、んなこと……ねえよ……………っ！」

空と錦の優しい言葉にムーチョモンは体を震わせ、自分の視界が次第に滲んで来るのが分かった。

「ちく、しょう……………なんで……………涙がこんなに出るんだよ……………」

下を向きながら涙を流すムーチョモンに手（翼）を離した錦が優しく体を包み込み、優しく言葉を掛けてあげた。

「僕、君の辛さを分かち合いたい。君の事、助けてあげたい……だから………今は、泣いてて、良いよ」

「っ!! ……くっ……う、うう………」

錦の言葉にムーチョモンはただ声を殺して静かに錦の胸の中で涙を流したのだっ
た………

「すまねえな、こんなとこ見せちまって……」

「……ううん」

少し時間が経過し、ムーチョモンが錦から離れて頬を掻きながら呟くと錦はフルフルと首を振った。すると、ムーチョモンがアツと声を漏らして家の中へと入っていく……数分して再び出てくると、その右手（翼）の中には1つの明るい紅色の機械が握られていた。その機械に空は形は違えど見覚えがあった。

「それって……デジヴァイス？」

「うん、勇気のだよ。これを……君に持って欲しいんだ」

そう言ってデジヴァイスを持った右手（翼）を錦に差し出した。

「えっ……でも……それは」

「確かに、これは勇気との絆だ。でも、これをお前に渡したからって絆が無くなる訳じゃねえ。それに、俺はお前と一緒に旅をして勇気を取り戻すって……今、決めたんだ。文句は言わせねえぞ」

戸惑う錦にムーチョモンはニカッと笑って話し掛けた。

「……………分かった」

錦はムーチョモンの決意を決めた表情に頷いて応え、それを手に取った。すると、デジヴァイスは光輝き始め……………光が収まると、そこには鮮やかな若草色に変わった一風変わった形のデジヴァイスになった。

「これ、色が……」

「きつと、お前……錦をそのデジヴァイスの持ち主だとデジヴァイスが認めたんだろうな」

デジヴァイスの色が変わった事に驚く錦にムーチョモンは目を細めて呟いた。す

ると、突然何処からか轟音が轟いた。

『っ!?』

「この音は………まさか！」

轟音の音源に検討をつけたムーチョモンは顔面蒼白となり慌ててある方向へと駆けていった。

「え、ちょ………！」

「っ?! 追いかけるわよ！」

「うん！」

「う、うん………！」

その行動の早さに戸惑う2人と1匹だったが、いち早く空が元に戻り、錦とピヨモンに声を掛け、共にムーチョモンの後を追った。

（無事でいて……ムーチョモン！）

錦はその手にギュッとデジヴァイスを握り締めて胸に当てつつパートナーを追いかけた。

小さき体の中にある頑固な勇気とその勇氣に応える太陽の獣

「だ、大丈夫？ 怪我とかしてない？」

「え、あ……………うん！ 平気だよ！」

チャックモン（友樹）は少年…………龍星が涙を流したことに驚き、思わず声を掛けた。龍星も自分が涙を流している事に気づき、腕で乱暴に拭うと笑顔で頷いた。

「あのデジモン達は？」

「…………分かんない。でも、『選ばれし子ども達を探して捕まえようとしてる』事は確かだよ」

チャックモンが手をさしのべて立ち上がる手助けをしながら先程から警戒している様子で自身を見ているゴブリモン達を指して問い掛けた。龍星は首を一度振っては先程盗み聞きした事柄を伝える。

「…………分かった。君は遠くへ逃げて」

「えっ……………」

「僕は一人で大丈夫。でも、僕は君を守れるほど強くない…………だから、君だけでも

逃げて」

チャックモンの問い掛けに龍星は戸惑いを隠せなかった。チャックモンの理由を聞いても、少し顔をうつ向けるだけだった……

「確かに……本人がどう思ってるのか分からないけど、今の俺はチャックモン………
…友樹から見れば自身の行動を邪魔する足手まといかも、知れない……でも………
俺も……いや、僕も選ばれし子ども（？）として逃げてちゃ、いけないっ！）僕
も……戦うっ！」

龍星はチャックモンの隣に立った。その行動にチャックモンは驚きの形相になった。

「む、無茶だよ！ 人間の体のまま……それもまだ小さいのに、無茶させれないよっ
！」

「それでも！ それでも構わない。僕は自分の身を守る術ならあるし……小さくっ
たって、山椒の実は辛いんだよ？」

チャックモンが龍星を説得しようとするが、龍星は頑なに自分の意思を曲げよう
としなかった。そして、ニコリと笑って見せた。すると……

「へへッ、君って面白い人間さんだねっ！」

『っ?!』

何処からともなく聞こえる声にその場に居た全員が驚きの表情となった……が、その声の主はザザと木々を掻き分けて二人とゴブリモン達の間には颯爽と降り立った。その姿はライオンの様な姿をしていたが、全身が明るいオレンジ色となっており、後ろ足を利用して行動しているデジモンの様だった。

「その心意気、良いよ！」

「き、君は……？」

「ボクはコロナモン！ 木の上でお昼寝しようとしたら、その人間の子どもの固い意思が聴こえちゃって！」

チャックモンが問い掛けると、そのデジモン……コロナモンはニマツと笑い龍星の事を指差した。

「ボクさ、そーいう決意聞いちゃうと助けずにはいられないタチだね。ね、ボクの契約交わしてパートナーになってよ！ ボクが君の拳になるからさ！」

そして、龍星の前に移動するとコロナモンはあどけない笑顔で龍星に握手を求め

た。当の龍星本人は少し驚いた表情になっていたが……フツと目線を落とし、すぐコロナモンへと再び顔を向けた。その顔には満面の笑みが浮かんでいた。

「うん、こちらこそ……宜しく！」

龍星が笑顔でコロナモンの手を握ると、二人の握った手の中から輝きが漏れた。そして、コロナモンがその手を外すと、そこには龍星がアニメで見た事のある鮮やかな堇色の機械……デジヴァイスが龍星の手の上にあった。

「こ……これが、僕の……デジヴァイス………」

「さあ、一緒に戦おう！……えっと」

コロナモンは一度龍星に背を向けてゴブリモン達を見ていたが、ふと自身が名前を知らない事に気付いて振り返って問い掛けた。その問い掛けに龍星は軽く微笑んで答えた。

「僕は龍星だよ」

「了解。龍星、一緒に戦おう！」

「うん！……良いよね、チャックモン？」

「……うん。もう断る理由も無いし、一緒に戦おうよ。龍星君！」

龍星が左斜め前にいるチャックモンに問い掛けると、チャックモンが頷いて答えた。その様子を見たコロナモンが笑顔になると、スグにゴブリモンらの方を向き、構えた。それに呼応してチャックモン、そして龍星もまた、構えた。

「さあ、僕らの戦いが……始まるよ」

『うん!!』

到着、チビモンの村!そして好奇心旺盛な子竜の固い決意

「……………あれ?」

「ん…………? どうしたんだ、ブイモン…………」

オレとブイモン、そしてさっき出会った女の子…………夕輝は夕輝のパートナーを探すためにこのデジタルワールドの森の中を歩いていた。すると、ブイモンが何かに気付いたかのように鼻をヒクヒクさせている。オレがブイモンにどうしたのか訊ねると、ブイモンは嬉しそうに答えた。

「この先にチビモン達のニオイを感じるぞ!!」

「「えっ!」」

ブイモンの言葉にオレと夕輝は驚きを隠せなかった。そして、オレ達がブイモンに案内されてその方向へ向かうと…………そこには何やら村のような集落みたいな場所が見えた。

「アレは…………なんやろ……………村?」

「あそこに一杯チビモンのニオイがするよ! 早くいこうぜ!!」

「おい、ブイモン!! 待てって……!!」

その光景に夕輝は呆気に取られていて、ブイモンは嬉しそうに駆けて行きやがった……オレと夕輝は慌ててブイモンの後を追いつけた。

オレ達が村の入口に辿り着くと、そこにはたくさんのチビモン達がオレ達に来ることが分かっていたみたいが集まっていた。

『ようこそにんげんさんにブイモン! チビモンたちのむりや(村)でゆっくりしてってね!!』

「うわあ……凄い………チビモンがいっぱいおる!」

「オレ達に来るの分かったのか……?」

「だって、このむりやでぞだったブイモンはみんなまちにでちゃうからコッチにかづいてくるブイモンはあまりいないもん!!」

夕輝は驚きの表情を浮かべながら呟いていたから、オレがチビモン達に問い掛けると、一匹のチビモンが答えてくれた。どうやら、里帰りみたいなのは無いらしく、

自分達の村にブイモンがやって来るのが珍しかった様だった。

それで、当のブイモンはって言うところ……

「「あしょんで〜!」」

「ちよ、ちよっと待ってくれよ……大輔、助けてくれえ〜!」

何匹かのチビモンに遊んでとせがまれている……だが、オレは助けない。だって面白そうだもん。チャホヤされ慣れてないブイモンを見てオレは他のチビモンにも声を掛けた。

「ブイモンがお前らと遊んでくれるってよ!」

「大輔!？」

『やったあ〜!!』

「ちよ、大輔……後で覚えてろよ〜!!」

……ヤバい、涙目になってた……後で謝ろう。流石にやり過ぎた……だ
けど、後悔はしていない。

……でも、後で板チョコあげよう。

「ねえねえ!」

「うん……？ どうしたんや？」

「アタシにいっぱい、にんげんさんたちのせかいのおはなしして！」

殆どのチビモン達がブイモンの方に駆け寄って行くのを見てみると、夕輝の方に一匹のチビモンがチョコチョコと駆け寄って行った。どうやら、夕輝と話がしたいらしい。

「ええよっ！ あたしは夕輝って言うんや。宜しくな！」

「俺は大輔だ！ 宜しくな！」

「うん！ ゆうき、だいしゅけ！」

折角だから、俺も夕輝の世界の話を聞きたいと思ってその場に残った。チビモン達の村に着く前に話をしてたら俺達の世界とは違う……いわゆる異世界から来たって言うってたし（その時にオレを知ってる理由も教えてもらった）………ちよっと気になるだろ？

「……………って感じなん！」

「しゅごおい! アタシもいつかいつてみたい!」

「行けると良いな、チビモン」

「うん!」

夕輝の話してくれている内容とかを聞いてる限りでは、オレ達とは然程変わらな
いみたいだった。それで話を聞いていると、どうやらリアルワールドでの年齢と今
の年齢が違っているらしい。今はオレと同じくらいみたいんだけど……リアル
ワールドでは既に大人になっているらしい……どうしてかは分からないみたい
だけどな。(敬語とかをどうしようかと思ってたけど別に気にしないでと言われた
からそのままタメで行くことに。)

そして、夕輝が憧れている人の事を話し始めた。その人はどんなに窮地に立たさ
れても諦めない心を持ち、何事にもチャレンジする熱血漢で正義感の溢れる性格が
良いらしい。

……この時、オレは自分を褒められてると思ってしまっただけ顔を赤くしていた
のは内緒だ。別にその相手の名前までは言っただけ……いや、言っただけ
だったからそう思ったんだろうな。うん……

それから数分後……はしゃぎすぎたのか、ブイモンは遊んでいたチビモン達とお昼寝をして、夕輝と一緒にいたチビモンも夕輝の服にしがみついた状態で眠っている。完全に夕輝になついている様子だった。

「それにしても、こりゃ完全になつかれたな……」

「せやなあ。なんか、会ってから間もないのから……別れるのが辛く感じるわ……」

そう、オレ達はここで一晚を明かしたら村を出ようと考えていた。スグに出ないのはブイモンが疲れている様子だったのもあるけど、何より……今夕輝というチビモンと少しでも長く一緒にいてあげたい。でも、オレ達は旅をしてこのデジタルワールドを救わなくちゃいけない。だから、一晚だけ村に居ることにした。

そして、翌日夕輝と大輔、ブイモンがチビモンの村を出る時……

「みんな、ありがとな! 楽しかったよ!」

「うん! 時間があれば、また来るで!」

「また一緒に遊ぼうぜ!」

『またね〜!』

夕輝と大輔、ブイモンは手を振って再びこれといった宛のない旅へと戻ることになった。

「それにしても……これからどうするかな………」

「せやなあ……いくらこれといったデジタルワールドの被害を確認出来てへんし……暫くはノンビリとパートナー探しするしか無いんやないかな?」

「そうだよなあ……」

「アタシ……たび、たのしみ!」

「……え?」

2人と1匹がどうしようか迷っていた時、聞き覚えのある声が聞こえて振り返ると、夕輝の足元に……夕輝になついていたチビモンが居ることに気が付いた。

「チビモン!? お前……どうして!?!」

「アタシ、ゆうきとたびにいきたいの！」

大輔が驚いて問い掛けると、チビモンはエッヘンと小さい体で胸を張って答えた。

「そ、そんなん急に言われたって……！」

「そうだっ！早く村に帰りなよ!!」

夕輝が少し戸惑いを見せつつ話し掛けると、ブイモンもそれに同意して少し強気な口調で言い放つ。しかし、チビモンも負けじと言い返した。

「だって、ゆうきのパートナーなるんだもん！アタシ、きめたんだもん!!」

「……………」

その強気な口調に大輔とブイモンはただただ言葉を失った。そして、夕輝も「はあ……」と溜め息を漏らすと……………

「しゃあない、一緒に行こか！」

「!! やったあ！ゆうき、だいしゅき!!」

笑顔でしゃがんで両手を広げて見せた。チビモンは嬉しそうに夕輝の胸の中に飛び込んだ。夕輝は赤ちゃんを抱っこする様に優しく抱えあげた。

「良いのか……?」

そんな様子を見た大輔が少しながら不安そうに問い掛けた。すると、夕輝は頷いて答えた。

「うん! あたしは別に構わへんよ。それに大輔とおんなじデジモンパートナーに出来るんや! それほどまでに嬉しいことは無いで!」

「っ!!」

満面の笑みで微笑んで答える夕輝に大輔は思わず顔を紅く染めた。

「……? 大輔、顔が赤いぞ?」

「っっ!! う、うるせえ!」

「いってえっ!!? ……俺、何か言ったっけ……………」

顔を紅く染めた大輔を見て首をかしげて問い掛けたブイモンに大輔は急に恥ずかしくなって照れ隠しにブイモンの頭に少し強めに握り拳を下ろした。頭に拳骨をくらったブイモンは少し目に涙を溜めてどうして殴られたのか分からないままブツブツと呟いていた。

夕輝は旅ができて嬉しそうに喜ぶチビモンを抱いたままその光景を見て笑い、こ
う呟いた。

「この旅が、こんな風に続いたまま終わればええなあ………」

戦乙女との出会い、そして少女と戦乙女との繋がる想い

「へえ、君もトレイルモンに乗って来たんだ……」

「うん！……勢いそのままに出ちゃったから懐中電灯持ってたけど忘れただけだね……..
エヘヘ」

この女の子……香流って言ったっけ………何か抜けてる感じだなあ……

俺は今、香流と共に俺の持っている懐中電灯一本の灯りを頼りに暗闇に包まれて
いる街の中を歩いている。辺りには色々なお店のようなのかデジモン達に住んで
いるのであろう家等がある………けど、住んでいる様子が見えない。足音や何か
作業をする音………それにデジモン達の声………ここら辺の音の全てが聞こえない
無音の世界だった。それに光源も今、俺が持っている懐中電灯の灯りだけだ……し
かも、この光は有限………これだけではどうにも不敏だ。何処かで灯りを確保し
ないと………

「あれ、ねえ。輝一………あの家………」

「うん………?」

どうしようかと考えていると、香流が何かを見付けたように俺の服の袖を軽く引っ張る。俺が香流の指差す方を見る（幸いにも手元は辛うじて見れるほどに慣れたけどね）……すると、そこには一軒の家が建っていた。しかも、そこには僅かながら灯りが漏れていた。まちがいなく、誰かが居るのだ。

「行ってみよう！」

「うん！」

俺と香流はその家の方へと駆けていった。

「すみません……どなたか、いらつしゃいますか？」

そして……家の玄関前まで辿り着き、俺が一度中に居るであろう相手へと声を掛けた後に見回してみると、その家の大体の風貌が分かった。その家は丸太で作られている………いわゆるログハウスという奴だった。しかも、近づいて分かった事が……時折灯りが揺れる事から、その光源は蠟燭なのだと推察出来る。建物の外

見に見入っていると、玄関のドアが開き……中からあるデジモンが現れた。そのデジモンの容姿は何やら戦乙女（ヴァルキリー）の様な姿をした純白な4枚の羽が特徴的なデジモンだった。

「……はい、どちら様で………って人間……様?! どどど、どうしよう………」
本当にあのお伽嚙と同じことが起きるなんて……!」

すると、このデジモンは突然僕達を見て慌てふためいてた………だ、大丈夫………なのかな? ……ってちょっと待って………さっき、このデジモンはあのお伽嚙って言った? もしかして……人間がお伽嚙に出てきてるのかな?

「………あ、すみません。どうぞ、中へ」

少し放心状態だったこのデジモンはハツとなるとスグに俺達を中に入れてくれた。

中に入ると、机の上に小さなアルコーランプが置かれていて、その灯りがなんとなく言えない暖かい光を出していた。そして、内装はかなりシンプルにキッチンや

寝床……それと、壁一面の本棚に綺麗に収まっている数々の本があり、それからこの戦乙女のような天使型のデジモンはかなりの勉強家なのかな、と推測出来た。その他の壁には天使型のデジモンが色々なデジモンと写っている写真が飾られていた。

「私の名前はダルクモン。この町……ルスルアタウンの町人です」

「俺は木村輝一。選ばれし子どもの一人だ。それと……」

「小野香流です！ 私も一応、選ばれし子ども……だと思う」

「やっぱり、あのお伽噺はホラ話じゃなかったんだ……！」

最初に戦乙女のような天使型のデジモン……ダルクモンが自己紹介をしてくれたので、俺と香流も自己紹介をする。すると、ダルクモンは目を輝かせて本棚へと向かい、一冊の本を取り出してきた。

「この本は、この世界に伝わるお伽噺なんです。その中の1ページにこう記されているんです……」

そういつてダルクモンはあるページの部分を開き、読んでくれた。

あるとき……世界を闇が包み込み、深淵の闇の世界より邪悪根源たるデジモン

……マルモンとその仲間らが現れる。その時、光輝く世界は絶望へと傾いてしま
う……………

しかし、この世界には目映き希望があった。それは人間の子ども達だ。彼らはリ
アルワールドからやって来る「選ばれし子ども達」であり、そのパートナーと共に
マルモンらと戦い勝利し、そして光を取り戻した。

「へえ……この、マルモンって……………どんなデジモンなの？」

香流が訊ねると、ダルクモンは下を向いて呟いた。

「……………言い伝えでは、その体は分裂できる上に様々な姿があり……………敵を己の世
界へと引き摺り込んで、相手にとって絶望を与える姿へと変化する……………と言わ
れています。マルモンはその名前によらず、恐怖のデジモンと恐れられていたんです」
「なるほど……………」

ダルクモンの説明に俺が頷いていると、その顔は悲しみを持っていく……………こう呟
いた。

「……………それに、このお伽噺は実際に現実となってきたんです」

「「え……!?」

俺と香流は驚きを隠せずに訊ねた。すると、ダルクモンは目線を斜め下に移して説明してくれた。

「……実は、この町は元々太陽を司るオリンポス十二神族のアポロモン様と、月を司るオリンポス十二神族のディアナモン様が己の力を使い、平和が保たれている明るい町でした。朝も昼も夜もしつかりとある町だったんです。でも……あのデジモンが……この町にやって来てからは全てが変わりました。奴の名前はフォンセモン。暗黒や暗闇を司るオリンポス十二神族になれなかったデジモンです。奴がこの町に来てから、この町は漆黒の夜しか来なくなりました。そして、アポロモン様とディアナモン様はフォンセモンへと戦いを挑みに向かいました。しかし……」

そこまで、ダルクモンが言うのとポタリポタリと、涙を流して続けた。

「アポロモン様は成長期へと退化なされ……フォンセモンの能力（ちから）の一つにより遠くへと飛ばされてしまい……ディアナモン様は……敵の凶撃により……亡くなられました」

「っ!!」

「ひ……酷い………!」

「それからと言うものの、私以外の町の皆はフォンセモンに恐怖感を抱き始め……次第にフォンセモンの配下へと投降し始めたのです。最初こそは、アポロモン様達の敵討ちをしようと提案するものが居ましたが………フォンセモンに反旗を翻した者達は……みな、命を落とし……デジタマになったのですが………フォンセモンがそのデジタマをも吸収してしまい、完全に命を絶たれてしまったのです………今では、その能力を恐れ………生き残った私以外の殆どの町のデジモン達は………全てフォンセモンの元へと降りました。その後はどうなったのか、私にも分かりません………」

力なく話し終えると、香流が恐る恐る訊ねた。

「……あ、貴女はどうするの………?」

すると、ダルクモンはキッと正面を見据え、その両手で強く握り拳を作った。

「私は………闘います。命を賭けてでも、この町の平和を取り戻す為に………

!」

ダルクモンの想いはかなりのものらしい。涙を必死に堪えて、いるその目は今気付けたけど……相当毎日泣いてたらしく、眼は充血してて目の下に若干の隈が見えた。相当悩んでいたらしい……俺はその言葉を聞いて居ても立ってもいられずに提案した。

「なら、そのフォンセモンを俺が倒すよ」

「……え?！」

「……俺は、この世界を救う為に………来たんだ。でも、その為に今目の前にいる悲しんでいる人を放っておくなんて俺には出来ない。だから……フォンセモンを倒すよ!……大丈夫。俺にはスピリットの力があるから………」

俺はまず、フォンセモンを倒す。そして……この町を………この世界を救う。………そう決意した事を言った瞬間、隣に居た香流が叫んだ。

「わ……私も! 私も、闘う!」

「っ!？」

突然のことで彼女の言った言葉の意味を理解できなかったけど………彼女も闘うと言っていた……でも、話を聞いてた様子だとデジヴァイスは無いらしい……

スピリットやパートナーデジモンも居ない……………流石に無理がある。

「む、無理だよ！丸腰のアンタに闘える筈がない!!輝一は闘う術があるらしいけど……………アンタは？闘わせるわけには行かないっ!!」

ダルクモンも真剣な表情でそれを拒んだ。すると、香流はそれに首を振って叫んだ。

「それなら……………貴女と共に闘うっ！」

「っ!!」

「私も選ばれし子ども達の一員なの。それなのに……………何もしないで見ているなんて……………できない!!」

「……………」

「……………確かに。ダルクモンが香流のパートナーとなれば……………香流も闘う事が出来るね……………もし、良かったら彼女の想いを汲んでくれないかな……………?」

香流の想いに、ダルクモンは黙ってしまった。俺はダルクモンに優しく問い掛けた。すると……………ダルクモンは握り拳をほどいて香流に手をさしのべた。

「……………分かったわ。私はアンタと……………ううん、香流と共に闘う！宜しくな、

香流！」

「こちらこそ、宜しくね？ ダルクモン！」

笑顔で握手を交わす二人……俺はそれを優しく見守った。すると……突然、香流のジャケットのポケットから光が漏れだした。

「な、何……？」

香流は一度握手していた手を離してその中を探る。そして、その中から光源となっていたものを取り出した。すると……それは俺のとは形は違うけれども……ま
ちがいなく、デジヴァイスだった……！

「デジヴァイス……私が、香流のパートナーになったから………？」
「……多分………ううん、絶対そうよ！」

「そうね！ よおうっし、そうとなれば早速作戦会議よ!!」

ダルクモンはそう言って地図を取り出すと俺達に説明をしてくれた。
そう。俺達の世界を救う闘いは………ここから始まるんだ!!

辿り着いた先には……そして、仲間を案じ心配する希望の想い

「……それにしても、このドラクモンは何処から来たんだろうね……………」

「ううん……わからないなあ……………」

あれからタケルと自己紹介を終えた桂吾は、ドラクモンが何処からやって来たのかを一緒に考えていた。その時、ふと横で考えているタケルの横顔を見ながら別のことを考えていた。

「（そう言えば……………友達が僕とタケルが似てるって言ってたけど……………何処が似てるんだろう……………？ 確か、外国とのクォーター……………なんだよね……………？ でも、僕は純粋な日本人（の筈）だし……………タケルはお兄ちゃんが居たけど……………僕は一人っ子。似てるとこんなて無いと思うんだけどなあ……………」

桂吾がボオツとタケルの横顔を見ていると、視線に気付いたようにタケルが桂吾の方を見て首をかしげ訊ねた。

「……………ん、どうしたの？ 僕の顔に何か付いてる？」

「え、あ……………いやそう言うことじゃなくて……………（ど、どうしよう……………あ、そう

だ！)か、カッコいいなあって……思っちゃって……」

「え、あ……あ、ありがとう……」

桂吾はハツとなると慌てて首を横に振って必死に言い訳(アニメで見えて、友達が「自分とタケルが似ている」と言ってたから……なんて言えないから)を考えて、少し顔を背けながら咄嗟に感じた事を伝え、タケルもまさか突然言われると思っていなかったらしく、顔を赤らめて同じく顔を背けて感謝の意を述べた。

「……………??」

ドラクモンはその様子を見て首をかしげた後、トテトテと何処かへ走り去っていった……それに気付いたパタモンが慌てて二人に話し掛けた。

「タケルにケイゴ！ ドラクモンが何処か行っちゃうよ!!」

「「えっ……!!」」

パタモンの声にハツとした桂吾とタケルは互いに顔を見合わせると、走り去るドラクモンを追い掛けていった。

幸い、ドラクモンの駆けるスピードは遅かったからか、スグに見付けることができた。

すると、ドラクモンはキョロキョロと辺りを見渡すと一つの建物の中へと入っていった。その建物の風貌は桂吾やタケルに親しみのある感じで……いわゆる学校だった。

「学校……って事は今のドラクモンは生徒さんとか、なのかな………?」

「……そう、なんじゃないかな?」

桂吾が問い掛けると、タケルも頷いてそれに疑問系ながらも返し一緒に近付いてみた。すると、建物の中から紅いローブの様な物を身に付けターバンの様なもので顔の殆どを覆っているデジモンが姿を現した。

「……おや、人間様ですか………? 珍しい………どういった御用で?」

「あ、えっと……実はここにドラクモンってデジモンが入っていったのを見掛けて……それで気になってたんですけど………」

デジモンの問いに代表してタケルが答えると、そのデジモンは苦い顔をして「そうですか」と呟き二人を建物の中へと入れてくれた。

「……なるほど、あなた方はあの伝承やお伽噺にある選ばれし子ども達と同一なの

ですか……………」

「まあ、似たようなもの……だね」

「とは言っても、僕はパートナーをまだ持っていないのでパートナーとなるデジモンを探さないといけないんですが……………」

桂吾達は自分達を案内しているデジモン……ワイズモンに色々と質問をして情報を得ていた。

この街はメカニークと呼ばれており、街の殆どが機械仕掛けのからくりで出来ているのだと言う。

そして、この建物は二人が考察していた通りこの街にある学校で……主に幼年期のデジモンを保育したり、成長期や一部の成熟期がこの学校で勉強や戦闘方法等を学んでいるとの事だった。そしてワイズモンは校長であることも教えてもらった。そして、桂吾達も自分達を選ばれし子どもであること、この世界に何かが迫っている事を伝えると、ワイズモンは自分達にできる協力は惜しまないと言ってくれた。そこで、桂吾とタケルは互いに別れて行動をすることに。

桂吾は自分のパートナーとなってくれそうなデジモンを探しに……そして、タケ

ルはこの世界の情勢や世界の歴史を知るために歴史書が保管されている保管室へと向かった。ワイズモンしか保管室の鍵を持っていないと言うので、桂吾は少し前からこの街に住み、幼年期の面倒をみたり、成長期のデジモン達を教育しているというウィザーモンと共に行動をする事になった。

「この保管室は色々な書物がありますので、恐らく何かしらの役に立てるか……それに、我々にも読み解けない物もありましたが……もしやすれば貴方達なら……もしかしたら解読できるかも知れません。一番奥の右の棚に御座いますからご覧になっただけですか？」

「ありがとうございます！」

ワイズモンにお礼を言って僕はまずワイズモン達が解読できないという書物が収まっている棚に向かった。何でも、この保管室はこの大陸の中で一番蔵書の多い場所らしい。実際、この保管室は学校の地下にあって……部屋の広さが、本棚が無かったら普通にサッカーが出来そうな位に広がった。

もしかしたら、僕達の世界の言語になっているのかも知れない……そんな希望を持って。パタモンにはデジ文字の書物で読めそうなものを探してもらっている。

「えっと……これとか……かな？」

僕は一冊の本を手にとって手近にあったテーブルセットの椅子に腰掛けて見てみる………薄い茶色の表紙には僕達の言語で『この世界の歴史や読み解きに必要なもの』と書かれてあった。

「やっぱり……僕達の世界の言葉だ………」

僕は1つ呟くとその本を読み進めていった。その本にはデジ文字の読み方やこの世界の歴史について書かれてあった。

「タケル、これ見てー！」

「……うん？ これは………絵本？」

少し読んでみると、パタモンが一冊の本を持ってきてくれた。柔らかいタッチの絵の描かれている絵本だった。

「うん！これに色々と書かれてたよ！」

パタモンに言われて手にとってデジ文字参照ページを照らし合わせて読んでみる。その内容は絵本ただけあってかなり簡単に砕いた感じだった。

「……うん。大体わかったかな……………」

絵本やこの本に書かれてあった事を考察してみると……以下の事が分かった。

今からずっと昔、マルモンという『デジモン達や人間達の絶望を力に換えるデジモン』が居た。

マルモンは6匹もの幹部や直属の部下となるデジモンらと共に深淵の暗黒城という所からデジタルワールドを侵略し、世界を制圧・掌握しようと出てきた。その時、侵略の暗黒城から漏れ出た闇のデータによりデジコアが汚染されたデジモンが自我を失い、旧友や家族などに敵意を向け攻撃をしてしまうという事態が発生した。しかし、この世界を司る神格のデジモンがマルモンの侵略を阻む為に異世界から8人の子ども達を呼び寄せ、子ども達其々に合ったパートナーデジモンや、ス

ピリットデジモンという特殊なデジモンを探させその光輝く力でマルモンらを撃退し、深淵の暗黒城に闇のデータと共に封印を施した。封印は、このデジタルワールドで生まれたデジヴァイスの機能を使い、封印する必要がある。また、そのデジヴァイスの機能は、正しき所有者が持っていないと機能しない。

『その封印は時が経っても解かれる事はまず無いが、闇のデータが膨大になると、解かれるかも知れない。だが、その時には新しき選ばれし子ども達が封印し、長い間の平安を保ってくれるだろう』……………かあ」

つまり、この封印が今解けている可能性が非常に高い……………って事か。深淵の暗黒城の場所は記されてないから自分達で探すか敵を捕まえて言わせるしか手立てはない、と。

「……………タケル、難しいこと考えてるの？」

「え、ああ……………ゴメンゴメン。ちょっと考え事しててね。ちょっと必要な事をメモするから待ってて……………」

突然、パタモンが僕の顔を覗き込んできてハツとなる。僕はそれに「大丈夫」と

笑って返す。

でも、これは予想以上に大きな収穫だな……そう思った僕は胸ポケットから誕生日プレゼントで買ってもらった手帳を取り出して、同じく誕生日プレゼントで買ってもらったオーダーメイド（らしい）のボールペンで必要な事をメモしていった。そのついでにデジ文字を今後目にすると思ってその解読の為の表も書き写した。そして、前の時に封印をした8人の選ばれし子ども達の見た目や、パートナーデジモンやスピリットデジモンと呼ばれる物も書き記した。もしかしたら、何かの役に立つかもしれないから……

「……これでよし！ それじゃ、桂吾君の所に戻ろうか！」

「うん！」

メモを終えた僕は椅子から立ち上がると、パタモンと一緒に保管室を出るために入口へと向かった。

「…………えっ！ な、なんで…………なんで開かないの!!」

ガチャガチャ…………

…………でも、小一時間ほど前に僕達が入ったドアは鍵が掛かっているらしく全く開く気配が見えなかった…………そう。僕とパタモンは完全に閉じ込められたのだ…………しかも、この部屋は地下にある上防音等もしっかりされている…………つまり、僕達の声は一切上には届かない……………と、言うこと…………

「タケル……どうするの………」

「どうする……って言われても………あ、パタモン！ 進化出来る?！」

そう、僕が考えたのはエンジェモンに進化してもらって扉を強引にでも破壊する……というものだった。と言うのも、目の前にある扉は銀行の金庫のように分厚い鋼鉄製でパタモンの状態だとどう頑張っても貫通させるには無理があるからだ………でも

「ダメ……何か、元気が無くなっちゃうの………」

どうやら、最後の望みも無理がある様だった………もしかしたら、何か結界の様なものが張られているのかもしれない………そんな予感さえも考えてしまうほどだった。

「……内線も見当たらないし、待つしかない、よね………」

僕は両手の握り拳をキツく握り締めてただそう呟くしか出来なかった。そして、フツとパートナーを探しに向かった桂吾君の事が気になった。ウィザーモンが居るとは言え、彼はまだパートナーを見付けていないかもしれない。そう考えると不安が積み重なっていった。もしも、ここで彼がやられてしまうと、再度封印が出来な

くなる可能性があるからだ。

「桂吾君……無事で居てよ……………！」

ただただ、無事でいてほしい。それが僕の願いであり、彼を想う気持ちだった。この想いが届くと良いけど……………！

一方その頃、パートナー探しをしている桂吾はと言うと……………

「……………なん、で……………」

教室の後方にて怯えて震えている幼年期や成長期のデジモン達を案内してくれていたウィザードモンと共に自身の後ろに庇い、目の前にいるデジモンを睨み付け左肩を押さえていた。その目にはうっすらと涙が浮かんでおり、左肩を押さえる手の

隙間からはうっすらと血が滲んでいた。どうやら、目の前のデジモンから攻撃をくらった為の様だった……

「何で……こうなっちゃうんだよ………!!」

彼の目線の先には意識を失っているワイズモンを右足で踏み付けて顔を下に向けている蒼い毛皮を身に纏う二足歩行の狼を模したデジモン……ワールガルモンが居た。しかし、ワールガルモンの体からは何やら黒いオーラの様な物が出ており、その目は紅く染まっていた。そして、桂吾の言葉にて顔を上げると、ゆっくりと言葉を発した。

「……デジモンの恐怖や絶望の叫びをマルモン様に捧げる………そして、選ばれし子どもを捕縛し完全復活の為の贄として差し出さん!」

デジモンアドベンチャー エクスト リーム～6色の新たなる選ばれし者達 の冒険～

著者 瑞田高光

発行日 2020 年 2 月 5 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://svosetu.org/novel/29334/>